西蝦夷日誌

五編六編

124
24

西蝦夷日誌五編 全

第八四号
全六冊内第五

東京圖書館

和書門	類	函	架	號	冊
地理	十三	三五	三	四	

29
Case 8
shelf 6

東西路事山川
地理取調紀行

西蝦夷志五編

貯多博物館
類屬 紀行
冊 廿二
函 十八
第三〇第山

多々家志樓藏板

東京
明治九年二月購求
教育博物館印

東京
西蝦夷地巡視乃爲を
[illegible]勇武故与里石狩越
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

本屋須清ゆへ此のかた書一百好事は
明治四年七月以上年始孫生望乃日新事
汲古堂主人河津祐邦
嘗能各事國柳
稱屋言ふ古をし毋
書画清の覚所也
与し巻可来

凡例

一此巻を四編小樽内（ヲタルナイ）ある銭箱より初寒札幌（ハツサブ サツホロ）を越て千歳（チトセ）に到り勇拂（ユウフツ）を到る新道を去る丁巳の林飯田某と係て開きしを今再度実験し絶せし其の我橋を記し続て小樽内ベツに始て石狩原田（イシカリアツタ）演（ハマシケ）無の二場所を造りし故あり其地形をイザリ以南を夕張志（ヨ）東蝦夷と法二編に図せを略之

一編中の図中海岸を画くに船を画きて無変より眺望せしものに非ず閲者その意をして見ゆらんことを

一文化度近藤守重の新策には石狩は大府我置んと我書きの故余は地を春の雪融林の暴雨に考へ法来して実験せしの此地の府を開んとす禹王再誕の後ある傳難ならんと故にすまた遥を探索するにツイシカ

り川二里餘上り札幌樋平（トヒヒラ）の處りて大府を置の地ありしと云ひ今は是を酋長（ルピヤンケ）ツイシカリ モニヲマ（サツホロ）を再三富（タミ）し以て鎮將竹内堀村垣の二人名を言し置きたりあり

一 他日此札幌に府を置き云ひて石狩を不日にして大坂の繁昌を得べく十里を溯（サカホ）り津名狩を俗見に留まる地とあり川舟二里を上り札幌の地を帝京の景ふまでも及ばん左右時を ユウフツ東海道を北陸山陰の角色なり為ひ宮高島を兵庫神戸の兩港にも譬ふべき地とあらんかと札幌より新笠を切らせ白地田（ウスアブツ）岩内（イワナイ）の地も此日の後を為東上にして勝より天陸十勝の地にも何日の馬足を運ひさしめんと依て此新笠を此岩を出す志るし置きたりあり又久田甲子の仲冬の氣土稱のこと人知徳

西蝦夷日誌巻之五編

五十瀬

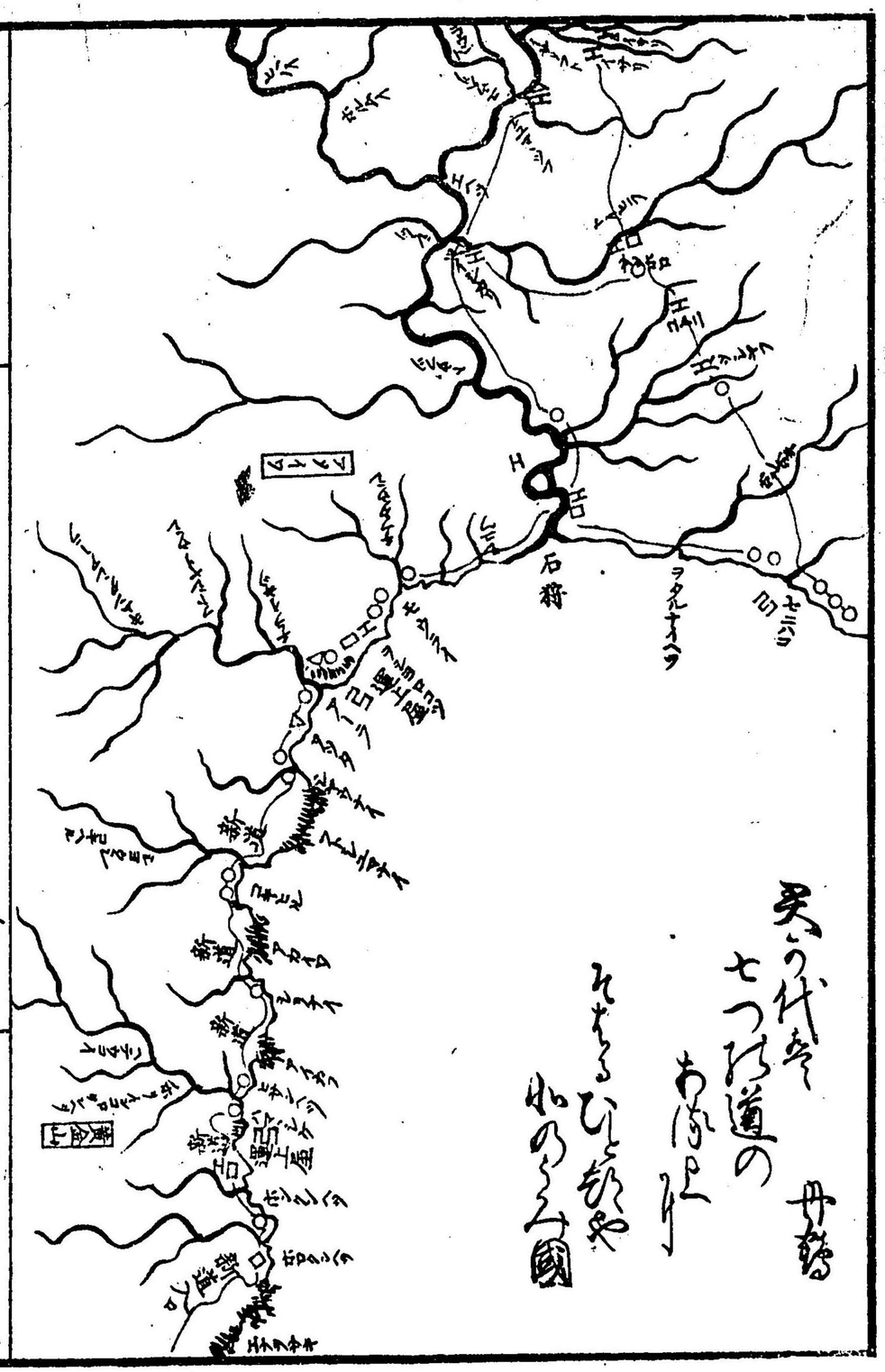
松浦武四郎阿倍弘 著

新道（ヲタルナイ）イシカリ

漢の馬援征蠻して薏苡仁（ヨクイニン）を拵ひ下民に授く有徳公を享保年間に琉球より甘藷（イモ）を取りて諸國に配ちかゝる今に到て百五十年にして諸國に能作を嘗さる者なし石州銀山領なる代官井戸平右衛門を此地味いもに宜く是にして領内食を満たること難ふ見と早く是を民に布しに依て此領民後數度の荒凶にも菜色をなきに匡ゆへ村に井戸縣令を小社に祭り春秋二度の祭祀を行ひまして朝毎年を供ふ家なりしかり上に在て此無活をなると不為して都て有ことなりし我に思ふ余弘化二年

三年雨度此處を通りしが此方の岩の下彼の岩を穹廬（マルゴヤ）りて漁獵ふ居たる時を潜りまして岩石の方飛越刎越て行しか十一年後安政三辰年通りしが同く此さ海の出稼金斗ふりしか此年ヲカムイ岬を女の通行を作しヨイチ山居を此年切りしや已来ともや通行の時は此邊人家ゐく引越し此間五月堀鎮臺なる又家に滞留て居るく此話なりしや去年飯田某と計て開きし新道も近く通行も志ぐ事なり此ゼニバコ家に旅籠やも出来て屏風襖の立たる家に宿し淡子房といへる破奴等も出来て開闢来まして和人（シヤモノアイヌ）の女を見たりしなり今日新を見ずる様にはしぞ実に賢れ

戊午六月十八日雇馬て出立 石狩（シコツ） タケアニ（イタクレイ） 此イタクレイは勇拂（ユウフツ）より出稼に参り居て四ケ年の方石狩に出ハ是に此方蒙子の面を見たりしが今日の人足に満りて蒙（ツヤ）の面（カヲ）を見る事よりと此夫蒙の方も雖ゐ二十里を隔る斗にて遠き所に生まれ貧人の

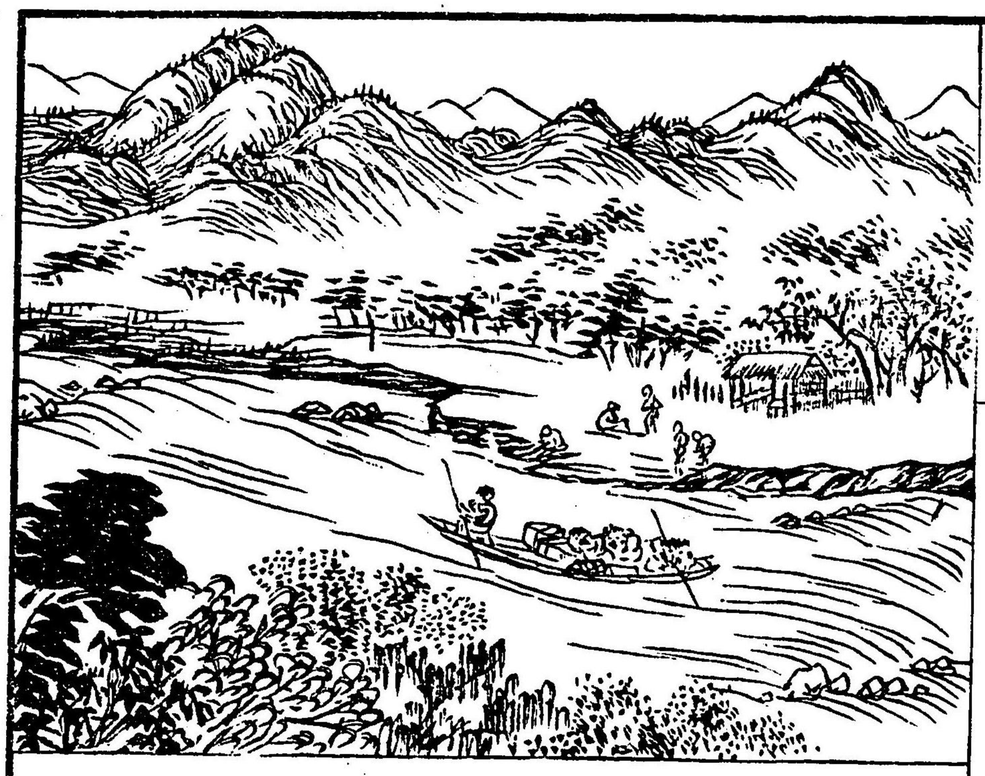


実の代々
七つ路道の
あらはれ
そなるひと知や
如のうみ國

丹鶴

豊前の悪に生徒を竹見より呼ぶ此出人の妻は勇拂の蛮人の妾に妹居る上に敢
夫と石狩に出し是に常に蕃や連行を語る是をまたも、ひろへしやりの出人を
クナシリへ出る是を生留守に妻は蕃人の妾に成を有り、実に是にのみ悪の
極なる所也 南の方に傍て所ナ所ホンナイ小川まで十二三所マサラマフ十七八所ホシホキ川 此處を唱
塩と云ヲタルナイ石狩 此處に去秋稱し新島中島中川葛山等いふ在住人の畑地
多く居る出人の話に大根蕎麦栗黍等よく出来たり
木立十余所ホンヌツナイ 蕃ホンシユルクヲマナイ名義少く鳥頭方る 深是ヲタルナイ
川に落る此邊畑を多く居る平地にて擇柏通コムニ 蕃サンタラツケ是よりハツシヤフへ居る 又フ
トルトクシナイ小川名義野に居る川の後ラウ子ナイ小川ヲカノツ小川テイ子ニタツ
小川チライヲツ小川ホンハツシヤフ川巾五十四方 此處に在住大谷大竹永田弓氣多

山田秋場に生地の人々皆住在余去年其乙名コモンタ家に泊し時とは大に
異りぬ フシコヘツ 本名ユウヘチラ ホンナツチヤ小川なる所コモンタ人家なり
ハツシヤブ川巾七八方 麁菜樹を聚たり 本名ハチヤムといふ此地に樹を似たる多樹
故に呼く生育チヨピシヽヽヽヒイヨヽヽと鳴なり是石狩或肥守丸の川之
此處に近き小舟も来る道し従是三里しに分る右エヒシヨマハツシヤフ 深ヲタルナイ岳と云
生源ウエンシリキシヨマナイ 茅多き 深なり たりルウトラシハツシヤブ 深サツホロ 山に到る イトコシ
ヨシケ 左源 深なり シヤマツケハシヤフ 右川 此川樹に多る山人号るシイシヤモウシベ 左川 文化
度最上其此處に至る者也 此人和人の有しと云 此に号くクトシンリヲマナイ 出川
深チセ子シ 深なり シイハツシヤブ 本川 源フウ子シリ 此山坂の木汁之は岳ヨイチ岳につゝ
川筋鮭鱒鯢チライ 桃笠兵通水清冷余は各日登道故川の源流を測なり



越てケ子ウシ小赤楊あき夜ホンケ
子ウシベ小ヨウコウシヘ小苫ニ三川
合てフシコサツホロヘ落るあり
コトニ川中至宮シンノシケゴトニ小チヱフンベツ
小シヤツクコトニ苫ニフシコサツホロヘ落て人家あり
茅野ありホンヘツバロ小ヲソウシ小
人家あり此邊一面の平地余樹なし
此邊に府を立ち利く思ふ左にて石狩
を大坂と沖石狩を伏見と尤川筋
二里を上り家を府に定め錢箱小樽

をして尼崎西多に本宮に沖口を立て
後年兵庫神部に比さんと云ふ此川蚯(アブ)
田有珠(タウス)に在を開かハ生雜理の仕事
んと察縄(サツホロ)川中至宮を遠近家を船を求まる
内者に成上方故一円裸にて手を成連て
流連成り可て先生廟を試て舟を下て
荷物を運ひぬ 法紗第六 至半四町 南岸を
トイヒラ 一株 ヤ と云サツホロをサツテホロの
成ものあり乾くの成此川名にて干(ホセ)
安き故にトイヒラを出崎西の成家に宿しぬ

夜に入レコツ弐人タクバレ山より薪一頭を肩にして来る是余の去来トウ路に遣りしもの
なり此等本山中にて獵人の仮小屋を見たるを以て猟夫の足あと見ろ小屋なり
しと云しに我其詞に驚きぬ更にまた倍り舎一宇と銭を贈
ころ我かくことに甚不精にて毎年も鱒を猟の床を備へてくし候
十九日微雨にまた是も共にて出立チキシヤフ小川茂辺神の火ありて旧道に足跡ありと
チキシヤフより火打の事あり依て蕃（アカダモ）をチキシヤニといふもあり是モチキシヤフ小川ニナル
ウナイ小川ラウ子ナイ小川是より少し山の麓を廻て左方に至てアシニウシベツ小川名義苔レ
樹枝を以て梁を架とし以て渡り（是迄の小川皆サツホロニ落ル）山一ツ越クテナイ小川是も川にシヤツフヘ落山一ツ越
ウツ小川海浜の見坂を上り此処眺望に石狩本川千歳迄一円の高地殊に見え
湿る処又九折を下りヨナイシユマツフヘツ（川ゆゑ是名南ゴ小池ありて）以川中一二渡りて

シユマヲマフトて（シユマ）岩有　此所惣て平磐ふるし

此川ゟ上二股ニ成ル　左ノニヲベツ小右ノ川ゟ本札幌ニ成ル　惣て此
邊ゟ岩壁多ク　其所ゟ上ハ　従是千歳領ノ九折峯ニ至ル　惣ゟ峻ク上ゟ平地ノ茅野ニテ　ロマヲツ小川
名義ハ二上ノ枝川ト云義ニテ　此ヘケレベ枝川ゟ名義ハ　此川ゟ上ハ　焼跡ニテ
有ル所ゟ此ノ川筋ヨリ　アツシヤウシ小川ヨリ　モイサリ川ゟ上ハ　ヒイ
サリノ枝有リ　小ヨロイサリトノ義ニテ　此ノ線ノ左右ハ　惣て平地ニテ　ヨロマヲツ小
張ル連ネシ高嶺ニテ　書ニ尽シ難シ　余ノ名ハ略ス　栗ヲ二合計リ焼跡ヲ
二ツ迄ト　其ノ余ハ皆ヒヘ畑ニテ　石狩領ノ有リ
始メ今ノ札幌ノ辺ハ　惣て柏林ニテ　其ノ中ニ有ル所ノ木ハ

（多蕊老木有）

シユマヲマフトて岩有　此所惣て平磐ふるし

此川ゟ上二股ニ成ル　左ノニヲベツ小右ノ川ゟ本札幌ニ成ル　惣て此
邊ゟ岩壁多ク　其所ゟ上ハ　従是千歳領ノ九折峯ニ至ル　惣ゟ峻ク上ゟ平地ノ茅野ニテ　ロマヲツ小川
名義ハ二上ノ枝川ト云義ニテ　此ヘケレベ枝川ゟ名義ハ　此川ゟ上ハ　焼跡ニテ
有ル所ゟ此ノ川筋ヨリ　アツシヤウシ小川ヨリ　モイサリ川ゟ上ハ　ヒイ
サリノ枝有リ　小ヨロイサリトノ義ニテ　此ノ線ノ左右ハ　惣て平地ニテ　ヨロマヲツ小
張ル連ネシ高嶺ニテ　書ニ尽シ難シ　余ノ名ハ略ス　栗ヲ二合計リ焼跡ヲ
二ツ迄ト　其ノ余ハ皆ヒヘ畑ニテ　石狩領ノ有リ
始メ今ノ札幌ノ辺ハ　惣て柏林ニテ　其ノ中ニ有ル所ノ木ハ

ヒイサリノ枝有リ　小ヨロイサリトノ義ニテ　此ノ線ノ左右ハ　惣て平地ニテ　ヨロマヲツ小川
ヲ過ギ　此ノ川ゟ上ハ　平野木立ノ　イヂリ川ゟ北ハ千歳ニ至ル　多蕊老木有
此ノ川ゟ上ハセウシ川ホラケシ　イヌウシナイ　ホロソウセチエホリカイ右ノ小
石迄添ヒ歩ル　此ノ上ヲ　イチヤラ岳トモベツ岳ノ右ヨリ　本ノ
峻シク名義　鮭ノ卵ヲ乾ス所ノ義ニテ　此ノ邊ニ加茂ノ
ヲヲカマケシ小川　木立有リトイヘドモ　平磐有リ　此ノ名ハ
線有ル所ゟ　先ノ川ヲ踏ヌ　此ノ川ゟ上ハ　イチヤラヨ　此ノ名ハ
ヲサツ川ノ分川有リ　名義ハ川原ノ有ル義ニテ　此ノ邊ニ加茂ノ
川ゟ上ハ　漸ク狭ク　イカニブシ小川迄ト　其ノ
川ゟ則湖ノ入口ニテ　舟入難シ　此ノ辺ハ　人ノ歩行ル
ヲヲ　此ノ川ゟ上ハ　漸ク狭ク　イカニブシ小川迄ト　其ノ

カマコンナイ小川 松前方言アマ石といへる岩有川あり夷言ヒをカマと云ふ此川
惣て盤あり平野右をランコウシ 老 イヨマイ小沼 此邊都枝の綾麻苦莫等の原
をあらしめ其子宗川番屋を右に 按シユマ、ツフ小徒所あり 此処カメ張り徒に出ス 惣て是迄の所は
林飯田東と松保澤と針盤を手に掛き方位を振て其荒葉を分け来りしも今
馬上に跨て往来あり今の程は宋にも有難かれ生時も石場と共に戯て徒居ぬ
千歳川の代理ん事の志あり此ことに出て今にあるの事の八子等 石場 高門
あり角鶴の志まる事なれ志る程なり子宗の望の者と通し紙を 弘
廿日出立 此是を又仕度山田屋又右衛門なる者切筆にしと云 衛是に程を路
幅も廣く林立る所をイサリムイサリの鰹を牛馬車にて二所にて下る是あり
ヒとよりユウフ迄まて小舟を下け船に積是則江戸にて云黒光と云鰹あり志をして

マツ 川ゆ子六 万橋なり 此邊皆燒砂あり此川シコツ沼へ落るルウサン 坂 有 キサラコツ 一里 坂
山の麓なる夜号くキサラを耳の事ヲホコツ 位 延 深きに沙へ号くルイカウシコツ
位 延 位まで飛ゆへ橋をかけて通る夜号く追分 右ヒ、 老ヒホエカリ 標を立たり
右に下迄いビベンコ ヒヒ云 名義 此名の上に湧出る後此邊に四 ヒロ も深き
水の壺なり 第名なり テトセ 此邊より小舟に横なり 傍崖にて風に系に迄西年の林を余見
船にて下る 此船 みり 南山目 萩蕪蒻蔚とて此方彼方より船の出入る所を
梁山泊の阮家の三兄弟の遊浜のこと也やと却ひ出ぬ
大や浦と豊蕪原の園の名をこの人にあるより時を先しくのも
たり 鮒 ヒホエカリ 小浦に臨て 寒くてくけり 此家を此家より舟積を傍に丸木船を
六隻も繋ぎたり名義二段の義ヒの方と水源の家と此処にて分る故号し之

方ヲ出ル小ナレシコロ川フレヒ、左レノマシヒ、脇ヨリ上アヒラの原と云ふ
ろで野地を西左右の高ミの中ヨリ桃ヤ或ハ疾駈ル列ヤ時ニ馬の駈ルヨリ
セタニウシヘツ小川（コナシ）流ル南ヘンケイ西ヘハンケイ西右左リ小ヨ
ある空シナイ小川ヨリ炭焼小屋ヨリ向ヨヲヘニケウ西ヘ入家ニ軒リ下リイリ
モヨロナイ小川（ヨリ）名義巌石ほう々ヨリ流ル樺木もくまく生ル桃膝ル砂多ク生石南花（ヨリ）
弱ク此辺ヨリ多ク実ヲ結ぶ地物ヨリ多ク生ハンケイリモ
ヨツ谷タツニウシ西ヘ小川ヨリ流ル（ヨリ）チライ岡ヨリ望余カヲナイ小川（ヨリ）此ヨリ
仕魚ヲ取ル小舟イフタトシ小名義巌石ヨリ流ル到ル
ヨリ舟ヲヒラ（ヨリ）先ヒノ（ヨリ）流ルヲ云テ番や岩（トヲ）温ヲウツナイ（ヨリ）流ル云岡ニケトヨリ四リ高峡
ヲ過ル則チ右ヒノ（ヨリ）要害ヲクロヨマフ小川トキサラマフ小川ヨリ東ノ方ヨメナシキサラ

東方ヲタムシ岡ヨリ名ヲホロソロカ小川ヨリ流ル大橋ヲ左右湯地ヨリ湧砂多ク上ヨリ大橋ヲ見ヲヒシ

橋（ヨリ）上ニ股右ヒノ川ヨリ左ヒノ川ヨリ流ル来ル方ヲ源ヲタルマイ高リヨリ名ヲ総ヲ義ス

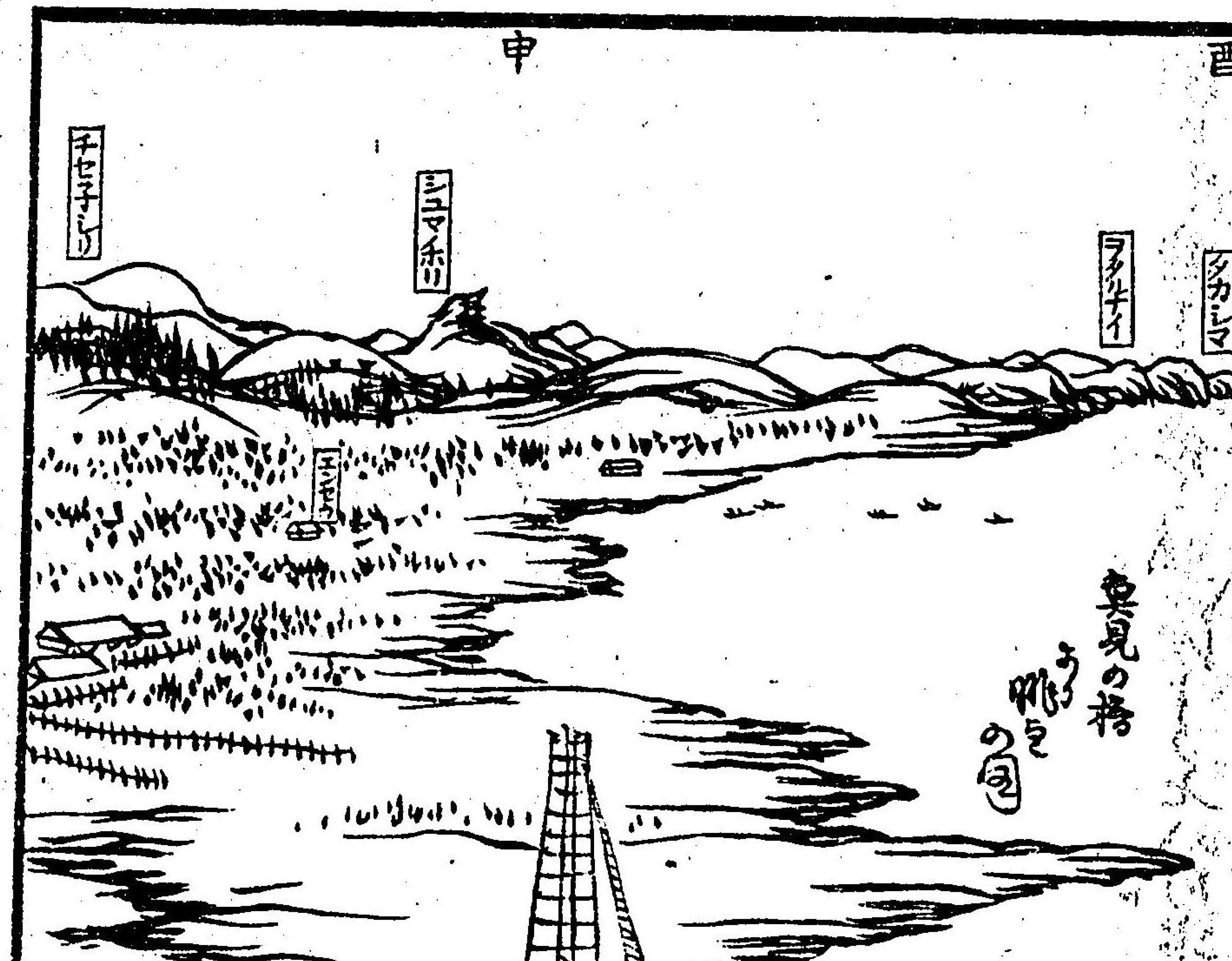
橋ヲ越テ平野ヨリ行ヲヒノ岡ヨリ通トマムノシケクシベツ小川中ヨリ来ルヲ云ヒノ岡ヨリ方ヲ云ヒ
ヲ云ヒイヌイナエシルン平野ヨリ合戦ノ古跡ヨリ多ク出ル
先ヲ糸ノ後ヲ曳ク故ヲ名ヲ一ツ十八日西洋ヨリ流ル（ヨリ）仕掛リ
里数ヲ知ル者ヲ聞ヲ尋ヲ来ル中今ヲ東湊ヨリ家ヲ来ル者ヲ稀ヨ
経一年ヲ尋ヲ来ル者ヲ難シ共ヲ本シ共ヲ書ヲ写シ難シ
従ヲ余ヲ裏ヲ東ヘ一條ノ川ヲアフラホロナイ（ヨリ）流ル（ヨリ）
岸湯地ヨリ流ル（ヨリ）ト小川ヨリ流ル（ヨリ）ト右川ヨリ流ル（ヨリ）ト依テ多ク小ロナイ右ヒノ（ヨリ）流ル

其餘小澤十ヶ所余ハ余ハ見より舟をもとハ上ハ二段ニ成る右をシ
ノマンアフラ（源アツマの方ニ到る）と云たり股小川ハ多ク相ハ字存せるハ此一生ハ奥
數少きハ故なりと土人道ハ住ハ今ハ皆濱ニ下ルと想ハ水源ハ濕地
ニハ鱸ハ此ハ鱒鯢チライ桃花奥のことなりと（ヲハニケフ土人サカシラリ中口）

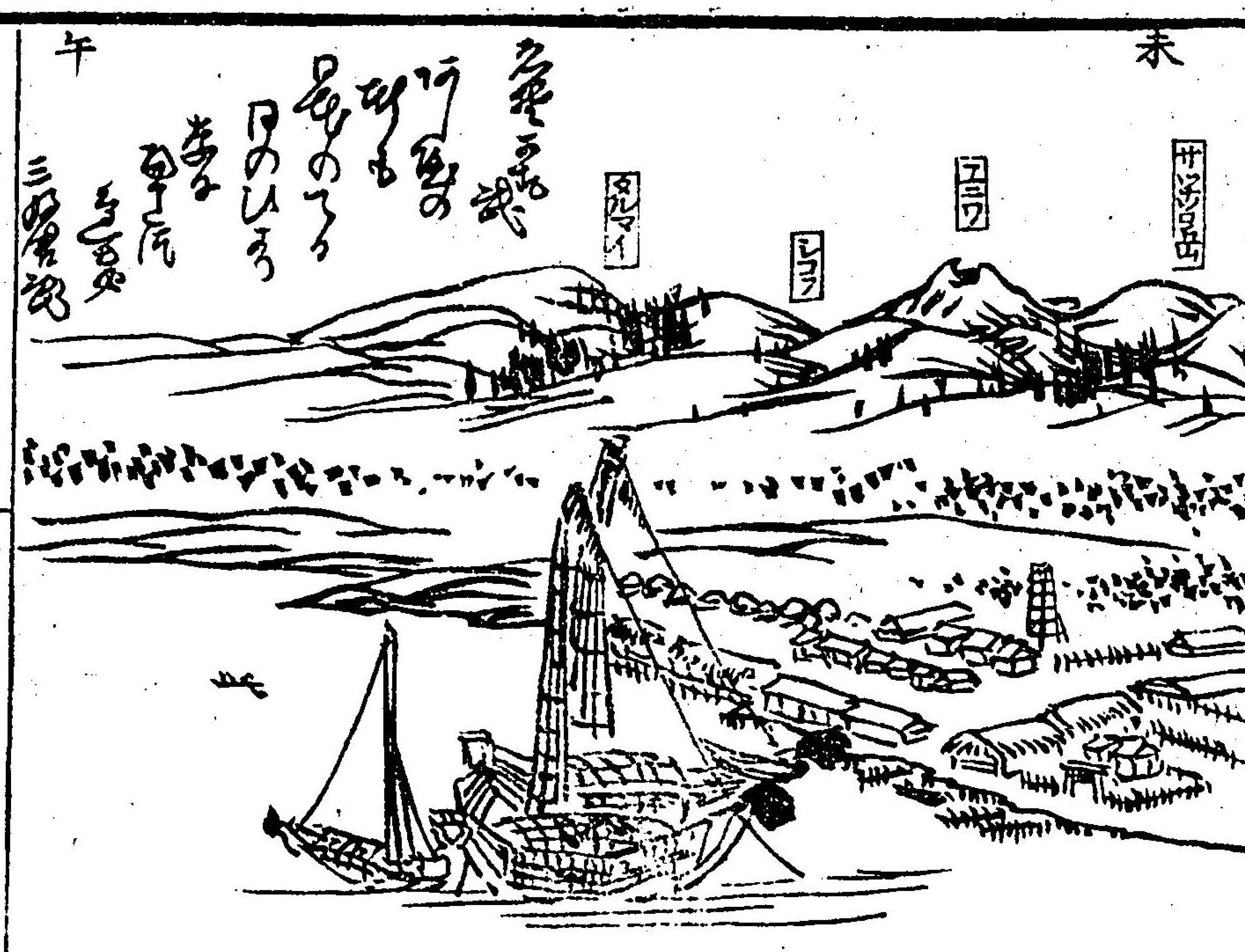
石狩（イシカリ）領

弘化度通し時鍬箱より東ハ一軒の家も無しハ今ハ法和（ヲタルオヘツ）ハ人家ハ
ましハ此ハ旅の家ハ橋を越て素濱（スナハマ）ハ一ツ廿二所 廿六日 折て フンベムイ 小体ハ一株 名義縣より
濱の後ヘンサーイタイウシ（砂坊）二イキリ（火）旅 見より急ニ出折 近年迄ハ溪中ハ
無しハ今ハ迄ハ立たり 二ツ十四所 廿六日 濱ハ折て 川口 川中百八十石 ヘツフトと云ハ
後川口の後ハ七所 四日 マチヤ 人家ハ立たる義 ヲ着ハ 恆ヲタルナイ 里上ハ八ツ廿八所

イシカリ元小屋（八百坐 廿七日 菰蒲所 備物ハ武器ハ ハ ハ十二 板ハ廿 濱ハ二 鹿山ハ 灰棕 ユウフツ出棕一 ハ ハ二 板ハ七 鹿山ハ一株）
他場ハ此ハ里上ハ此ハ又ハ元小ハ云ハ石狩ハ二ヶ所の元小ハ
と云ハ里起し事なり先ハ此ハ上ハ又ハ其ハ東ハ弘化四年の洪水ハ皆能
まハ此ハ元稿せしなり此通ハ蒸ハ通ハ此度直捌ハ東ハより稿ハ往の者も
多く僅一年の日ハ一ヶ所の所家となりしも偏ハ体的の所無ハ多ハ
この山の道とハ別ハ本ハ相ハ又ハ此ハ夫ハ此ハ
イシカリ詳ハ行ハ先ハ元形ハ云ハ生成行ハ歸初元ハ水源ハイシ
カリ其ハ此ハ生ハ集る川ハ有ハ又ハ説ハイシヤハ此ハ成ハ
りとハ塞ハ事ハ此川筋屈曲ハ塞ハ見ハ有ハ地名解地形西北
向ハ想ハ平地ハ味濱より七八所上より其土ハ東濕地ハ其ハ迄ハ陸ハ



椴樹木賊多く此辺より道川筋に近ヨ
今も有けり トクヒタ 三百七十人 シユマヽツフ 上下ツイシカリ ハツシ
下ユウハリ 四百九十二人 上カハタ 三百九十二人
サツホロ 百八十四人 上ユウハリ 三百七十二人
上サツホロ 百八十四人 下カハタ 百二人 ナイホ 廿九人 下
シ百五十八人 文化六年改
さて其数六千七人 と云ふ此所にて此辺
人別も有しを漁場より川口まで凡百人計なりしがヨ
寄り合今は僅か人員減じぬ実に是に惜むべ
らずや 文政壬午改 弐百五十八人 安政乙卯改 三百七十人 是は漁場へ人
より雇はれ稼方厳しく支那のやうに生業を
させ請負より差し帰を已まずして別れ請負に
至り此辺を水臘樹(イガタ)に蕃椒(トウガラシ)を植し(ハラム)

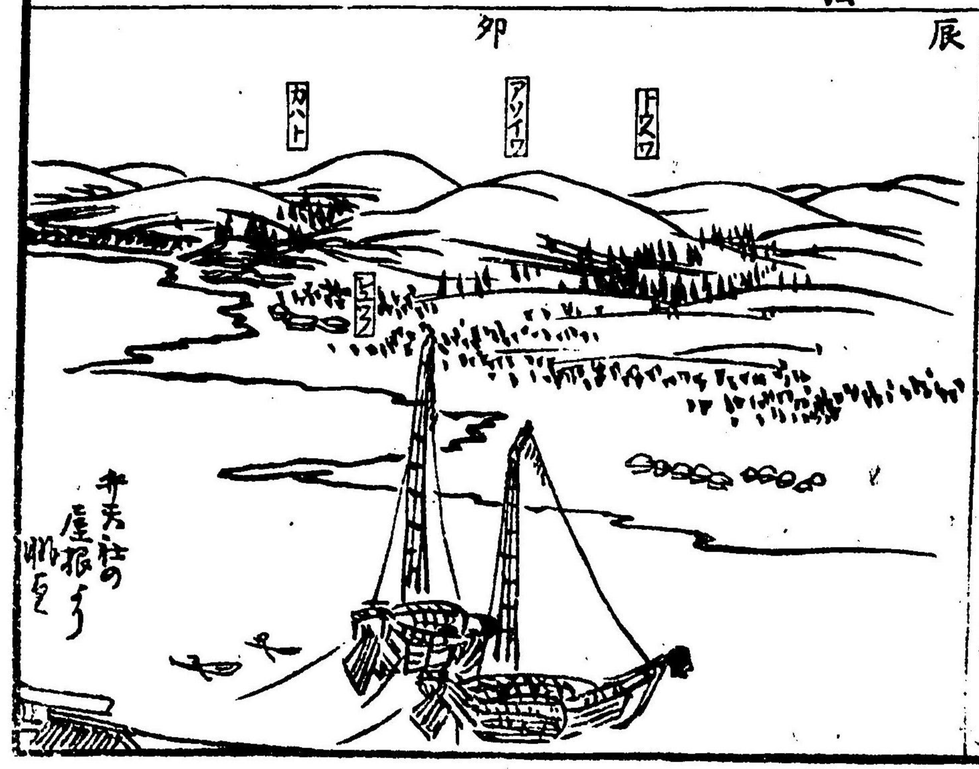


是より男子を奪し脱船させ男人員日々に
減損を川口へ名佐辺に移役させ出入させ
修を為し是より出入にて ヨフイ 岬南を
る漁岬に有一大湾なり其出産物の
多き事を世に知らるゝ数観概は是等
ライ魚(チヤウザメ)鱘鰉を初として比目魚(ヒラメ)
にヨナツ鮭並ま川にまで藻魚(ツエ) チカ
鯎(フジ)魚多し此地にて不思議と云ふ川上
また並行斗水常に増して有やの地に水
の上にまた東川の傍にて水ガネと云ふが

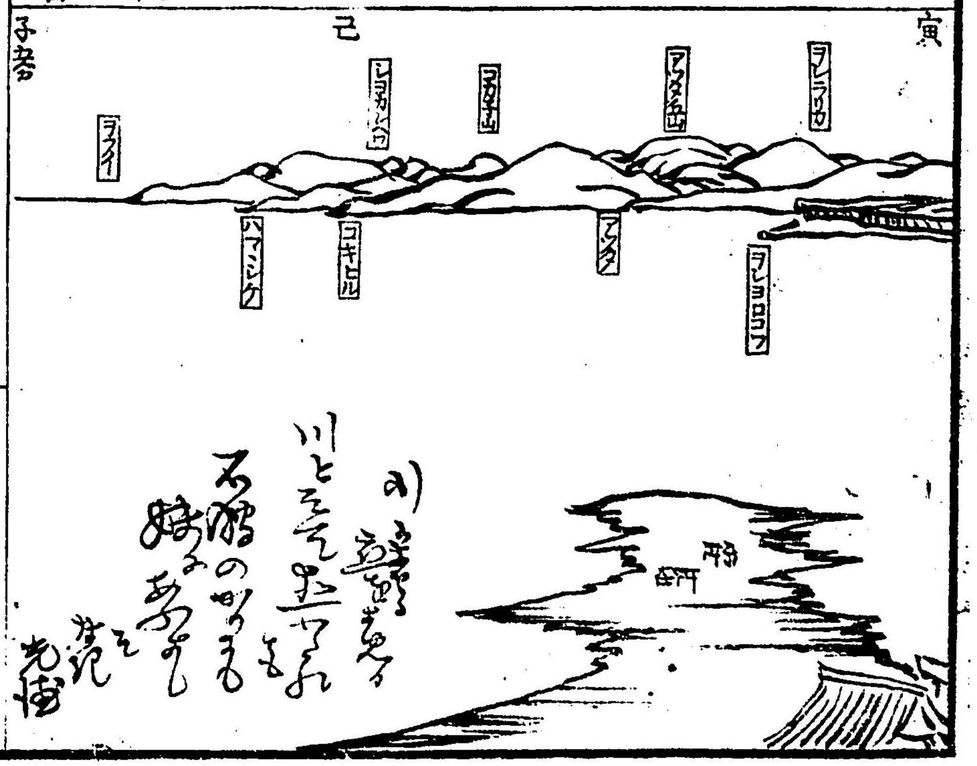
多氣志樓藏

近ニ奥野ノ不日建ニ云リ川端ニ
辨天社 妙乘法鮫ニ作リ 社殿美ニ成
立ヨリ

于時文化三歳丙寅二月
正神主白鳥遠江守敬白
所祭素戔嗚尊之御子
吐普加身
奉勸請石狩辨財天嚴島大明神御事也 御鎮座
依美多女
元祿七甲戌年于此所勸請
天下泰平國土安穩蝦夷地靜謐漁獵圓滿
松前若狭守從五位下源章廣朝臣御武運
長久



吐普加身 天下泰平海上無難
奉祀嚴島大明神
依美多女 國家安全風雨順時
石狩境内漁業圓滿
文化五年歳次戊辰
春三月
祭主
藤枝淡路敬白
願主石狩場所中秋味船中
吐普加身 蛭子明神 漁事万足
奉勸請天照皇太神八百万神
依美多女 嚴島明神 海上無難
松前神明社
正神主
白鳥伊豫
謹言
文化十二乙亥年
春二月
當社ニ元祿七年石狩川秋味上乗役松
前家臣山下作左衛門新ニ付私先祖白



[illegible]

水棹[illegible]

東岸ワウシ坊と云 此処へ諸役所を已来[illegible]調役若井金助の[illegible]

今を川の東西共に無[illegible]地と云 此辺[illegible]六尺位ヅの[illegible]桑[illegible]

木賊(シラシフシ)[illegible]又赤[illegible](ウニンデ)天麻(ヲニノヤガラ)を産を陸に一線[illegible]肉蓯蓉(モレツリ)[illegible](ニクシユヤウ)[illegible]

[illegible]

ヒヨ[illegible]ヲタルナイ坂 四里八丁一万 鮭漁[illegible]

アツタ領

アツタ[illegible]榆皮(アツタ)取[illegible]

川[illegible]

[illegible]

義経公此処に来り[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

布海苔等の磨爛したる如く其まゝ數ヶ所に岩より種々の貝石を出す

蛤蜊化石（ハマグリイシ・カキノマテ）にして大なるは二尺丈陶（トウ）位の物にて寛く其色も見事也 浜形云 子ヌ肉ハ同し崖下

ナヒ所 四十ヲ間 ムライ 鮭鱒 小沢有 川巾十ヨ間 樋有 モウライ 石浜 風景よろしく閑にして開けし等佳る段

南岸出稼場にて地目上方よく開け上に雑木山あり 其先雪中石狩の

出入にアツイワ岳の赤を越てトウヘツ 石狩枝川 の上ヨ下り 樺戸山の辨を見てトツシに出

るに至る事ゆえ是最初近を開らきて此海岸を抑りて便利あらし

従是箇所つき 十四丁 弐十余間 サランベツ 小川 此辺より林有 此あたり酒屋也 サラバと云て

此辺りの段々有り ヲ子トマリ 本名ヲ子トマリ 小川 湯 南方 石浜は大様に本ヌ

海岸野にて川口を留る所多く此辺沖に暗礁多く船も此間に入る故道従是

ホロナイ 小沢あり 廿五余間 ウエンシレト 小岬 岩道 往き 流れ 来りし故多く此辺沖の

暗礁多く船を通ふ所は多く人家つまり ビイ 平磯 石浜 沖の岩上にして林

峙の有る数多の椎茸を突て捕る故名くるもビイと云実也 コタンヘツ 十ケ所 廿余間

小川 巾 弐十余間 等より左家あり 此辺は沢多く此辺茂や酒屋出来より 町二十

川の形少くして二股左をホンコタンヘツ右をチフタウシナイと云 上をシマン

コタンヘツと云也 源はアツイワ岳より来る 奥に鯇鱒 チライ 桃花魚也

崖の下十軒人家つまり 近来此辺を漁場にして今至りて出来る 枝石狩運上や 二十丁 廿二ケ所

ヲシヨロクチ 運上や一棟 板倉十二棟 弁天社 庫や 大工や 漁や 新番所 弁天社より稲荷を合祀

地形角戌向にて後ろ平山 崖の柵を結て是下暗礁多く船溜

よりて大船を容る事にて ユウフツ 石狩 出稼や 鰊 地の出入

凌七文政壬午 和人のみ入込居る處 夷人

土人嫌農好漁獵
中外雜居理耶
只主人先見如
盤石収在方寸
掾筆中
中井知藏持篇

海門殘照
庚子春日寫
雲樵生家

土產鯡鮭黃海鼠生鮮椎茸鮃鱗雜魚浮海鼠等之類不鯡の為まる
他場所の出稼と云るものを皆百石目は十石生鯡ならハ百石目は二十石と定
有しか當所にて十二石を運上やは納む是漁事の宜しき志るしあり
一所四十五万 アヲシユマ 崖下 苫しアヲシユマと云土人住せしか故に号く 蝦ヘロカルシ
平磯 鯡取の後は此邊斷崖を切り生所へは家居して漁事をし崖下
羊腸は邑を附せよりて遙の上に背原上に乾もしり江戸に積ある魚にて當に土
一升は金一升の他にあるの家も支等の發は比する処にある哉 四所 苫 シレエト 崖岬 莫て七所 苫て二ヨト
マリ 崖下人家 苫し寄り木あり故に号く 八所 子 ホンコタンナイ 蝦コタンナイ 蝦や茅
苫し土人とも此浮にあるく住せし故号く 蝦ヤーマシラリ 仲は 苫し此邊の上
網を卸し鰐を取し故号く 此人家あるく市所のみ

[illegible]

十二町 三十丁 ベツトカリ 當やこやぐ 和名ベツタンバケと云 川の[illegible]と云 [illegible]

より云ことあり 三町 五十丁 アツタ 川中ナ[illegible]丹[illegible] [illegible]云 [illegible]

名あり アル 譯て 白芷 アルシヤク の[illegible]と云 [illegible]此学シユウキナとも云 [illegible]

[illegible]アツタの地を[illegible]先あり 処[illegible]アツウルシナイとも云あり

[illegible]

[illegible]

イ右 [illegible]

[illegible]

アラヲマホントウヘツと云 [illegible]

[illegible]

百峋犬湍雪珠古聖新溪路間内中陶
嶙下奔噴跳万塞在開上刀初畫看邨

人家つゞきて過シユマガタ過ホン平小石浜 此ヨ平へ 十四町 ホロナイ 過ホン
チヤラセ 澗 ツルエサン 小澗 名義崖より下る道と云義 過アツウルシナイ 小澗 居り
出入多き道より椴松を以て造る番屋の様なく出入の者の言にアツタの名此処に
なると 九町 十六町 トモンベツ 小川 渡りて屏ビラが平へ出て台場の如く事する
也あり此よりは虎班所を出て是又シヤコタン所の如く及び相てゝ可渡なりと云 人家
リイ平 平 右平の後 四町 ヤツスケ 小澗 ヲヨーシヨ シユケ 小澗 名義崖し小き網を干して置し
とも云後なり 此辺なり 二十八町 是より陸続に行人多く通し
偖今般御改の命下り去辰の冬より此地に 丁巳六月二日 着 切拓きて陸路
鎮将堀君通行し給ふに附従て出立しけるに峰を越え所に切附
ある路より降る事 三六町 山の猿東に入本土凡じ七八町 チカフチヤラ

ツナイ 谷川 是より上は此辺より 川中を渡って入る右に此辺岩様石積みて越え一つの岨を
行る也 此川中に渡り上る 七八町 二股 右ヤリ川 左ルベシベ 是より左股へ入りて
て雑樹陰森なり 三六町 甚しく山嶮しく此より又右の方の笹を上りて 四五町
行る事十町程続きて 杉の下枝を扇の如くして
深く此邊の地を越えて峠より南にコガ子 峠より シヨカンベツ
岳に至る一円に見え原の果は此辺の峠 三六町 原を下り椴松の
木立の間の道を辿り木の根に足踏みて 二十町程 コキヒル川の
南に出る実に此險阻なる道をも雨の続き後は切方にて之を越えしに
て是を以て馬足を通す事なく覚ゆ
偖海岸を行きて 人家つゞき 十町余 ペセパケ 小澗 此名義もしれず行りと云ものはなし

多気志楼蔵

見より船をもつて上を崖あり三所四十二丁チカフセトシナイ小澗清川山名ともいふ
川あり名義を魏の巣ゟ有といふ岐岬を出り六所ヲヤラセナイ小澗此下少の船
濱上を崖あり崖樹枝を垂て恰も倪家赤壁の間の地に生様実に好あり
ルエサン岩 注書此岸より岩を下り路の跡ゟ有といふ義あり八所四十丁フトシ
ユマナイ大光宮名義大ある穴岩有依て号く出りて崖絶ひ二十四丁五千丁ゴキヒル
出稱有川有ゆ子六丁小舟渡し名義水渦巻（ウヅマク）といふ事あり（シリカトヤロ）ましくホキンビリ事即ち
蔭のまして蔭といふ後あり此岬の蔭あり船を号るゟ地名解此所此岬とア
ツタ領の岬の事を水の渦巻ゟ船を号くとも此川を以て懐目と云 懐ニ
物懐目六ゟ十子所ヲ有て 従ヤソツケ切口海上を一里一所陸路を二里廿四所ゟ有
とシリカトヤロ 昔を懐目をヒシヤンヘツタを取ひ乃アツタを出入ゟ所ゟ出船コキヒル浦の

呼を濱益へ呉者しなりと云り

ゴキビル 川筋少シ上リ ヲクリキヲマナイ 右川ニ二股ニ成リシヨウシゴキ

ビル 右股 是所ニ第ニ落たり ホロコキビルとゝ云ヘ 此源コキビル 岳より

来ると鱒鯢桃を呉名通

濱益毛（ハママシケ）

本名マシケイ ましきと云 故に是同名ゆへ濱の字を冠して

當ホの地名とは 地名解 マシとは 鰐（カモメ）の名ケとは ケイの名ニて来るとの故

此海湾ニ西ニ鯢の群来る時ニ鰐ニ来るより別ニ成リ又ニ鯢ニアマシユケ

ニアマシニ穀物シユケニ炊く義道判官ニ此所ニ飯を炊きたりし

とも云り此地ニ今のハマシケヘツの湾ハ此ニ里ニ名ニ地ニ名

ヘロキカルウシ 所ニ鯢取多きの故ニ此ニ丈ニ皆ハマシケヘツの方ニ

ニのこと住し我當時諸夷の法始ニより下けし故此川の名今熱場ホの名と

ありしより物依目を入ニ小石濱傳ひ出し

今ハ此ニ岩の山路越ニ来ニ而ニ稱ニ人ニ云ひ

赤岩岬 大岩 本名フレシユマエンルンといふ此岬コキビル岬と對ニ湾を成ニ此処新石切口

上リ口ニ折陰表ニ雑樹老ニ上リ上ニ峠ニ至るコキビルの山路ニ切方ニ

粗ニ有ニ此方の山路ニ能るよく切始ニ有り余場の時ニ安ニ取りかハ夜早

切仕舞ニ有ニ此ニ暫ニ此峠より下を俯ニ白浪岩根を洗ひ眺望云ん方ニ

此ニ後ニ不ニ四方ニ見ニ ヲクリケ濱ニ出たり 此ニ一り十所と云 此ニ濱ニ海ニ有ニ名元ニ有ハ

浪ニ海ニ岩の巖ニ有ニ賛成ニ浮ニ出ニ其ニ有ニ眠りニ至

峠を下る事十町 シリナイ川小川 左右広く名義
水の湧出る所と云義也 しばし行て
是より出稼人家有 此処は 九町 シレル
トコ 訳而シレル トルと云 名義は山の尽る所と云義なるべし
大岩横り 十町計 ウラヌカルシ 大岩名義
未詳 従此 十町 ヲクリケ浜 名義 ヲクリキナ
と云草多き故と 此辺少しの湿地
有り ヲクリキナと云草多く生し谷地有る
所 此辺の様子 日光 ウル イと云木
地にて有る 此より此辺へ出る 一説に

多気志楼蔵

近年迄土人住せし由 当時出稼小屋
有りて川辺に舟を入置 此辺 入口なり
雑樹陰表 延九町を上る 十二町 此処
蔭道を下り 三十丁 ビサンベツ 浜え
出る 此山の麓廻り 此方二山の
内 切方才一羽 不見馬 只草の
ある 是 出稼人 掘川 善
蔵 人の名 シカノスケ と云人を
蔵し と云 四五年余 七月
家 住の者

多気志楼蔵

一人手曰何程と曰数を後ゆ者に生備こゝを様皮様皮を剥しに生銭ゆこと賞
上ヶよく備くまゝ二人等の稼を殺し稼次第侵銭を切る程を殺し
ゆゑに生仕法潔るよ也備ゆこと生前を出剤居もまゝ寄しく道あり
従是まゝ大岩塁まゝ所ゆゑブエマシラリ大崖塁 詳ゆ岩の破れ落る後ゆゑ堤
海岩まゝ浪蒼くあり奇巌怪石簇にしてゆゑ出稼や通し
此海目志見上ゆゑルヘシベ新居の所あり 上ゆゑサカツキナイ右股と云ゆゑサカツキとゆゑ礦石のゆゑ
法雪金丁の入アイ金銭掘し跡ゆゑ生源ゆゑシノマンフエマシラリと云岩山ゆゑ
ゆゑ入ゆゑ居ゆゑ所しまゆゑ生者しこゝのみ也ゆゑ
同し岩岩 云十二所 十二所 アエカップ 大岬ゆゑ千鰈の岩突出ゆゑ此岩の土人此岩の
上より矢を殺ち寄ゆゑ下より矢を殺ちゆゑ其ゆゑ常ゆゑ出し有ゆゑ居しあり

平貫雄寫

アイカツフとは出来ざると云事を云也岬を呼りて エヤシベカルシ（ヤウヤウ）一株 昔し土人
等小網を以て此処にて莫を取始し故事にて号く 頃見小石濱（土三所 本名 カバル）
シ（砂濱）本名カハルシユマ有り 并て ビザンベツ（川中ニ書 有し所）詳しく小石濱を考る
後有りまた一説に鮭鱒多きとの後とも云り 山尾此所にて甘る有り
川筋志辺上にて二ツに有りホロヘツホンヘツの二筋に分る 川筋図
頃見沙濱（并て リウト 小津上を惣て）平野に有り 実に小沼を依て号く（一ツ土所 廿八所）
沙濱に有しるを
ハマヽシケベツ（川中十万所 船渡シ 生涯）南岸蒸萩原見当 船が第一の川に有る故号人る有り
本名をヲタコツベツと云と名義砂地両の川との後見砂地に有る故号し
其の有りまた此所をカワスモ（此ニ人を川下の義なり）と云余始て遊行せし時は夷家

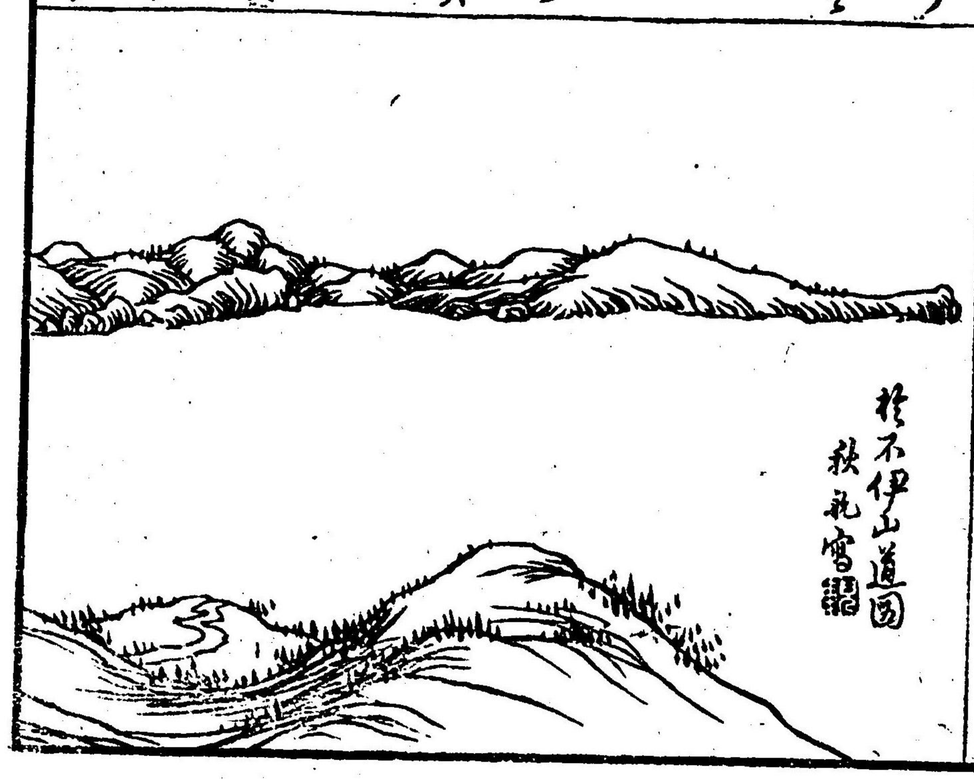
小新余にありしが今は一軒も無く和人の出稼家のみ立つまきたり
川の南岸濕地にて解極の平地に見へたり此地をして開拓せば不日にて
三万苞を始めると易かるべし志辺にて サラツナイ 右ノホリインコロクシヘツ左チフ
イヲベイレレケヲマナイ 右此辺にて廣地にて如何にも 地味よし 二段（ヘテウコヒ）
頃見南山陝く有り右をホンマシケヘツ左をシノマンマシケヘツと云左にタイ
ルベシベ（丸山）といふ 雷（スヲ）盆（バチ）を伏たる如き山有り 和人ニ行をコガ子山と云 此後ハ
昇源にて又ラ岳と云 石狩様戸の山に到るは一説 此タイルベを義経公
の住居志のみと云 生時甲冑を出し今化して皆 頓蛇に茶を有と
云 伝ひまた文龍天山の頃に 魚坑釜にて此所号とも云り
大夫の伯代もまつりたこの山こう様の者も今也 清く良舞

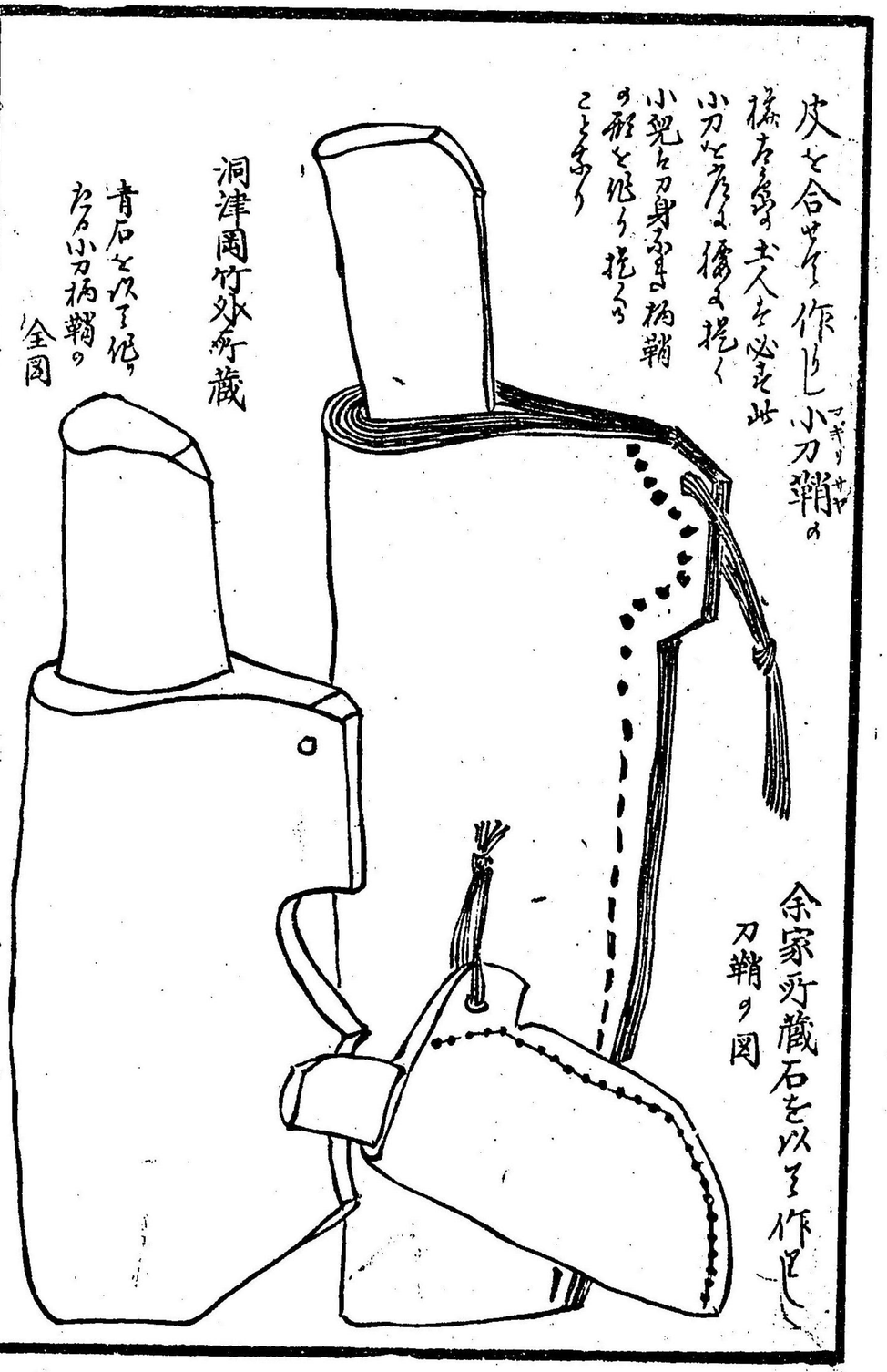
渡て行浜十丁程 ウカシマナイ 小川 沖に
岩多々有り過て此より浜を離れて
峯へ上り越る故に此辺なりと
ホロ平岩 大岩此処は浜は通り難し行き故
山越なるを切て峯上りして出る 八万 此処
是よりヘロカルウシ 峯上りより下る 新道 浜出
是より云なし 坂二 アツタ峯上りや 七り十七町 程有
濱益毛 峯上りや 通行屋 小制札 備へて有 坂下六棟 茅ぐら九棟 鹿有
海浜や 大ユホや 浜や 立わる 辨天社 わる少し 稲荷社 稲
地形並一河 是は去未 御仕合 吉川 居屋 更

多気志楼蔵

建立せし地 船ヨフイ岬 岬を
大澤中より アイカフホロクヘツ 岬の
小澤有 東中内より 迄渡海すれば
並んで左に ウカシユマ 右に テキサマの方
深月深く 渡る 家より 浜辺
新石有 辺 岸の上に立出 浜
家並 小川より 新道 出る
文政五年 八十四軒 二百九十七人 此辺地系
安政三年 四軒 三百〇四人
運上屋 此辺より 畑地を
出産 鯡 鮑 海参 鮃 鱒 生鮭 雑魚

多気志楼蔵


於不伊山道図
秋孔寄謂



[illegible]名義大なる小石川の後高岸下九所 四十八ヘセエバケ 十二所 四十八トコタン小川本名トツココタン 諸人蝮蛇（マムシ）の祖と云後近来人住せしが今は遠出稼を新を並人を居り此邊より近き海岸悪しくなる故境を新居を切んとの時宗（コロコタンクルイトイチセ）宮居跡有るに此より後は岡後一枝の石を拾ひて雷斧石石烟管等を陶器の欠根の物多く掘居りとて土方の者とも余に与へ故余是を砂ゆるに物にて最故重一方を論じ居り然るに我が勢津の岡崇が此石を似たる物一枝を示す余に示さる余未だ是を得ず用ひしや不解しか近頃考得たるを樺右衛門用る左小刀の形なる我と思ひる依て此里を岡氏に示し居りしが此語を承知して建喜といへる翁を古くより骨董の癖ある人ゆへ或時り出ひ世かい是又此考を足とせし事を同品に物を余に贈られたりと其物依て集めること事と

皮を合せて作りし小刀鞘（マギリサヤ）の様右衛門の土人を必ず此小刀を居る様に拵く小兒を刀身にまた柄鞘の形を作り拵くのことなり

洞津岡竹外所蔵

青石を以て作りたる小刀柄鞘の全図

余家所蔵石を以て作りし刀鞘の図

云ふなん、今爰に図して同好の士に示すものなり

いつの世に[illegible]人[illegible]

川上二ツに分れ左ルウチシヨマヘツ川、右より雪[illegible]丈余[illegible]シヨ

カンヘツの源に越し是右本川也[illegible]黄金山[illegible]

ヲフイ岬は我北地第一の険岨にて陸路より九里八丁の間波浪[illegible]

九月中旬より廻船難く[illegible]

滞留の事[illegible]只山猟の土人のみ山脈を知りて[illegible]

其南はアイカプ岬コキヒル岬の難所の北ヲヌイ岬の[illegible]

[illegible]故に此山道を開くの事[illegible]死人黒

[illegible]思を起し[illegible]出稼孫

三郎与助外土人乙名レカノスケ、脇乙名レヨウカタ、平土人アワサレ、惣名乙名トンケレロ等深雪

中に分入目印して安政丁巳五月十八日鉞を入、同月より六月十六日迄出稼人の力をと

[illegible]入切開き[illegible]一方ならず[illegible]此切開[illegible]余六月九日此地に[illegible]越[illegible]

六月十日出来の[illegible]此山道出来て[illegible]死去[illegible]云へ

[illegible]トコタンより[illegible]小川トコタンヘツと云[illegible]木七八町 樹木[illegible]社

[illegible]此山道[illegible]

椴の木[illegible]七八町 笹小や 小ヤ 人足[illegible]小川 此水フラヌイに落る[illegible]水清冷[illegible]八

[illegible]レユルクタウシ[illegible]二里余の[illegible]一滴の水も求め[illegible]此人足[illegible]

[illegible]つへ[illegible]

[illegible]ん

多気志楼蔵

木立山を上る亭(ナカ)凡山に出る處より未
申の方を眺むれば一面の大海を越て
向に後方(シリベシノボリ)羊蹄山を望む其源系革
の為に変ずる山皆赤土にて砂
接り五葉松の三尺五尺の拘泥に別せ
たるを見る又坊主と云木にて見る
毒草のはじ反を葉の落る者号るの犬
此木を煮て其汁を拾給に塗り海
獵に用ゆるに如何なる海馬も一
ぬりて斃(タホレ)さるなりしと此邊居る

穢の為り然し少しも泥を去難治
なりと云ひて又冬分は雪吹ゆきて度々
換ゆると丁(ナカ)なり赤平十七八丁峠に到る是
より左岸つゞきカムイトツハ岬の上に
到る右はホロクンヘツ岳に續く境是石
狩湾一面に尾也 洪善氏の方よりいふ此処を境目と云はし
三四町 樺色樺角く大岩突出したり
其邊一面に白管生たり此邊に少し
泥地にて其邊とも水無し少樺立て
雨多を持たせ其間と云ひる右にて

ショカンヘツ岳一周より凡五六町 箸原とも云有り チセフンヘツと落り 右の下々

ショカンヘツの源は岩高き源より滝となりて凡道し 二四丁計 ガンビタイク原戈樺なま

より早く 是より此 西を望む 此處四時となり谷間雪残り此氣候の寒

ありて岩長 所二四 岩瀧原とも云有 所六七 山の此後を見る所是イワヲナイ岳

と云く名残瀬原岳の後あり 六所ナホ 此處又山頂中背一の高杉あり 所二四 有る

シュルクタウシナイ 源谷に鳥頭を取りて来る谷の後 所ホンナイ 源小川 此川

ショカンヘツと落る所 二四 無小屋 小ヤ入足 是よりして後来茶屋にて

と読し是傍に於布（オフイ）在の社と云を建 金毘羅神を祭る祖に移さんと

鎮遠基に顕山を志すめ以来前にへ出し至る是片下りイワヲナイ

源 左ホロフイウシナイ 源 小石此 此右 源エヒコタサウ フ伏 川ホンナイと合

多氣志樓蔵

ショシカンヘツより落る崖岩を見て凡ヤムワッカナイ 源是よりホンナイより落つる岩

茂冷水源の後 ホロヘサキ 岳及の左の方より山此後五葉松一面に青繹

を敷たる如く此左り一此頂に残雪ありては源泉実に妙なり 絶

フイウレヒラ 源 フイウシナイ 絶 シユンケライウシ 小川 有り其よりホンベツに落る

此名残嘘のフイウシとして後る ホロヘツカリ 源 ヘツカリ より此処より眺望

其より別苅（ベツカリ）源より凡道し上より大別苅（オホベツカリ）岳山の此後大岩突兀と破

駒の五葉ある一面に萬茂り前にて目是りし此の有り 無小屋 下の小屋と云 入足小屋有り

是上の小屋 凡二丁 是も茶屋まで行と読し坂を是れ以よく積み来下りて

上りて左大別苅源る エニルンコマナイ 源る右の方に凡 凡二丁 ホ

ンナイ 源と出る 此山凡九 十余有 実に此大山は不知 成功の歳

多氣志樓蔵

に解くけるなるへし依て年々於布居社を建しかれ生廣おのすて一
柄の木幣をなりたる
去年ゆへは雪も井のものと見し雪も乃ひけゆく山と栄色
偖從トコタン一般なるに於て崖金嶮山に来る木にて拾も倪家の山に大宋を
流し趣にけり時に霜濛の為に変現なるを言葉も草も乃ふ事ならず
轉右演をなすてラフルマナイ小澁名義水に澁るの後苔し寝に往せしもの水に
澁て鮑を補喰居たると依て号く同じく岩壁六十四所チセツシベ小澁出稼近
江出来りと名義を家の跡なる後まて嵩壁六十一所カムイヲブトイ大岩
出人の言語へに苔し米方様此邪まて舟にて来り恒見上り山越して
増毛に行なひしとカムイを出官公を稽し チフを船トイを上りし

といふ後なり此邊今を出稼屋後の谷なるに近も出来なり窪下タンパケ
岩板名義海獺獵に来る時休息に来る所号く此和西海岸第一の岬也
此邊見上るに椴城老松繁茂し生なる岩角の鄙なる極実に重も乃家
に行る所十七所ヲフイ岬大岬焼たるとの後此邊鮑なくまて海栗海帯下に一
両に若たり九所カモイアハナエ蒸ヒヤタアンナイ澁乃ち轉右演なり六所
エナヲサキ大岩此處に苔し米方に行りしが中跪したるとまて近江立たりおこ
一ツの屋にあり寝を境目とす 横アツタ 七リニ八所 此横苔しを十八所南にあるヲフ
イを以て立しと今寝を境とするを此番屋の方に後人の陸来ことを送迎
に出し我以て来りと知りたる
そしかんと知りたるけまも儀のことを見て波なの沖つ島山

124
22
24

とし筆の博物を休息所の程に書なし云ぬ

西蝦夷日誌巻之五編 畢

西蝦夷日誌六編

第八四号
全六冊内第六

東京圖書館
和書門
類 函 架 號 冊
二 三 二 四

東西蝦夷山水
地理取調紀行

西蝦夷誌六編

新刻 紀行
屬 丑 廿二
西 十五 八

多氣志樓藏版

東京帝國大學圖書

元洲

一此編西部增毛境エナヲサキ不等ニ起リ一回場所ニモツヘ三ヲ以前の
三場所を總ルモ今然ニアイ山道は前編ニシテ以前の部に書ク
是閑易ニシテ人多キニ石狩中川ヨリ二ヲ丹川ヨリ二ヲ頓ヌブシヤ城の山ヲ
歩ニ文化度令律家人數の難ヲ由ツテ附安政三年事ニ就テ此部
字知ル志三巻を摘ス今ヲ其ニ又ブシヤの処ニ出ル事又閑易ニ
ヲ以テ委員を知ルニ欲ルモノの士ニ全編を閲覧ヲ入ル事
二紫前領コタンヘツは古潭別誌同領波保呂ヘハボロ誌ニ以テ誌ル事
一此地此編の紫前より先ニ海岸ニ漁獵の者ニ誌ルヲ見ル事
ニ於テ此地の風俗ニ於テ奥狄海岸五歩十歩ニ於テ

30
Case 8
Shelf 6

東西蝦夷山水
地理取調紀行

西蝦夷誌六編

教育博物館印

明治九年二月購求

購求

凡例

此編西部増毛境エナラサキ小平を起して同場所ルヽモツヘ并に苫前の
三場所を誌ることを然ラフイ山道は前編濱マシケより以越の部に書續なり
是閲易からんが為まで石狩中川なるラシラルカ川よりマシケ領ヌブシヤ越の山道を
去る文化度令律家人數の越せし由ゆゑ附安政二辰年是を試しこれ紀行留
宇知ウヂシ志三巻を摘て今まで是をヌブシヤの処に志るを是又閲易からんが為
すりこれ委發を知らんと欲するの士ハ全編を閲覧せん事を
一苫前トマヽイ領コタンヘツは古潭コタンベツ別誌同領波保ハボロ呂えハボロ誌を以て誌とす
一此地此編の苫前より先に海岸に漁獵の産物を誌るされども是産魚無に
ふれあらず此地の風俗として魚類海岸五歩十歩に居る地なりて是を

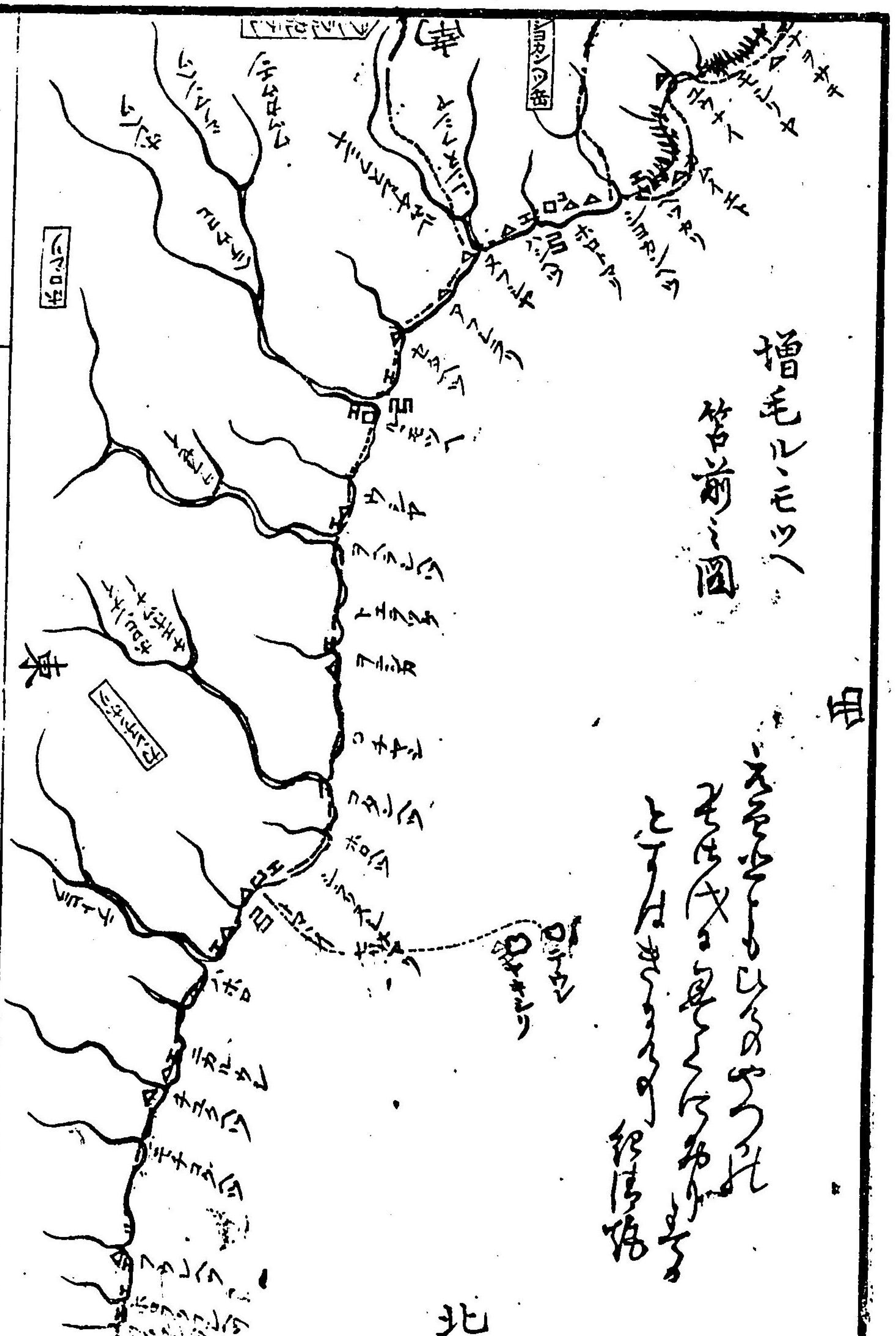
取蓮は南海土州の鯽鰹魚（カツヲ）は海上三十里を乗出して是を釣り奥州氣仙の緋魚（メヌケ アカウ）は是まで武十里を出て釣り肥の五島人は西海めしまに到りて支那人とせる海鰱（ブリ）を釣る是皆世に知る処也此地漁具舟々の不自由はさて置其産魚海岸五歩十歩の地に寄るゝ故に敢て遠きに及ぼすして是を漁す是を産多きゝ故来多し其此地にして能く山岳海陬まで實格志て其所産に依て其業を解ゆえ能ゆゑ此地をして不毛に比し置んと我と文久甲子の晩冬大江戸下谷三枚橋の寓居に志るし早出

西蝦夷日誌六編

松浦武四郎 著

増毛（マシケ）

マシケ縁ゆゑ当夏子に取る也其文を書て縁さハマシケ路の子にしてケもケイの略にて来るとの義也此地一面に路に云ふ事ゆゑ路に多くハ鯖（ニシン）多きゝ故なり其マシケの地ハそのホロトマリ（笠上屋ちなり）をさして云也其地名ハ協処の越名と云る故境目を過ぎ岩屋（一丁十五号）傳ひ一條の流出有ヤムワツカ（小流）と云拝遣之ゆゑ水作青羅帯山如碧玉参と来る晩霧の雷切るゝ小堺峰窓見と志るゝ依実にも也見るヒカタトマリ（小湾 魚や一様 岩天社 芽くゝ 小休所有）岩澗の義也南風の至り湾によし此意演形乾向にある（十丁 平四号）エシヤマニルヲマナイ（小浮名義 獺の路ある義 一丁 廿五号）



トノフトマナイ 三丁 弁才 ヲフイヲマフ 岬 岩 名義焼石ある所なるを云ふ 六丁 五十間 ケマフレ 六丁 廿八間 トレフウシ

小 ウハユリ 澤 蕗菱菜貝母多きを云ふ此辺の海岸近年は人家無りしかとも此頃出稼の

若者此しめたる岩角宿とも家居するなり 七丁 廿五間 ヲマシルハル 小 流る 岬を過て

弐丁 三十間 シユルクウシヘツ 川 小 鳥頭多き澤の義此上山名イワヲ岳の下の澤なるなり 四丁 四十間 此

辺持有石濱 モシリヤ 澤 小 上に岩壁あり小島あり此様の海藻等も拾ひ採る多し 五十七間

カハルシヤ 出稼 多し 三丁 廿四間 イワヲ泊 まゝイワライ とも云 上に澤あり是より依て号く 弐丁 廿六間

ユートマリ 澤 小 温泉の末流此処へ落来る之 三丁 アツラロウシ 川 小 名義椴皮を浸し置

く所の義此辺も温泉の気ありて椴皮ハ温気の処にて浸し置く故

よし号しものとて 弁 ルチナシハトエ 岩 座るて 弐十丁 九間 カムイヒ 岬 岩 録て神伝之 五十 十三間 ホロビ

当俗言 第二岬 名義大岩之 此岬第二岬と云れども西地神岬 ヨカムイ を過りて此岬之号 七丁 四十間

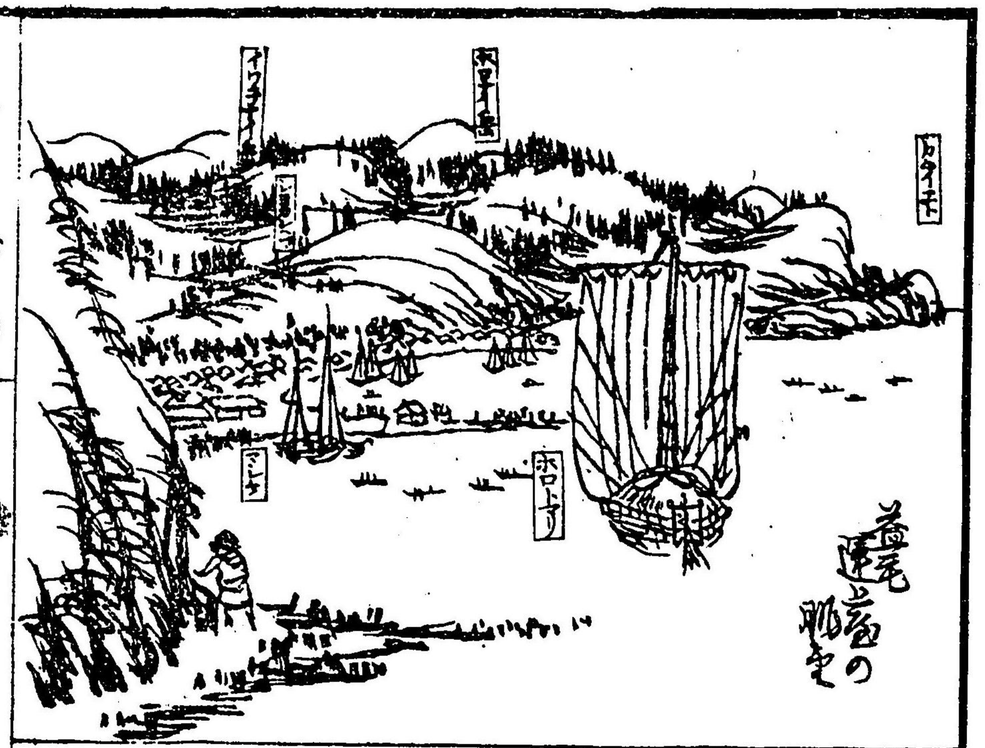
ヲンチナイ 小沢 大澤の義 三丁四十五間 アイビコタン 岩磯 鮑処との義アイヒは本邦の古語にして
住る氷にあるひさた多りと云由にて知るべし 漁屋二棟 かや蔵一棟 夏秋此処に土人へ来り
鮑をとる所なり

やゝ此辺の平磯の庭をなしゝゝも勢思ひやりしひやゝ海辺磯辺の子
岩磯つゞき 小ハ丁 ホンカハルシ 砂浜 カハリは比目魚の事にて此処に多きと云ゆゑ号く 五丁廿間 エヲ
モイ 小湾 岩有本名くあるの故に号く 無きを此を追出稼と云ふよりなり 五丁三十間 ニヲモイシ
レパ 小岬 此所より岩壁羅嶋よるの崖下を過て 五丁四十間 アヨクシナイ 小沢 過て 三丁
エシヤマニ 小沼沢 此処にて其源の儀小さき故沖より見え難く隠れまして知れざる故に号しとか
并て チシヤルシリ ハ七丁廿間 チタウケベシ 岩壁 此所過て 三丁四十間 ベシユウトル 大岩壁 湾し 名義壁
之の事九儀 七丁五十間 カムイチヤシ 岩壁 神の城跡と云儀は其削立様に成して

多氣志樓藏

夜へ向ひし古跡ありとて土人等本邦をとゞく今以て 一丁十五間 カムエエ
ト 大岩岬 名儀神の岬乃儀なり今も夜は本邦を往舟の此処を祈る
事の有る此処ん前に火をやかなる時は雲の如中ゟそやうなして当望
六丁三十間 カサシユマナイ 三 大岩 是より砂浜よりる人家多し 六丁十六間 カワチリワキ 小川
鯡の漁場なる如くなり 三丁五十間 ヘシトカリ にて 并 大ベツカリ 小川 漁屋 板庫 往来 夷家 新 十七
右は此浜形東より南へ来たる東をノツカ西カムイエトの事一湾をなし波濤を砕
四丁 シレエト 岩岬 過て 三丁廿五間 エンルモコマナイ 小岬 名儀岬の沢の儀 ホンナイ 小川砂浜 漁屋一棟
オホ二棟 いなりの社 此処よりヲフイ新道に入る也
・此所に其の事にてヲフイ嶽と云ひし山の中腹より...
五丁五十間 ニナイベツ 小川 名儀に出る川の儀此源ショカンベツと合するとも云 三丁五十間

多氣志樓藏



モイ小湾人家并て二丁四十号ヲタルヲマナイ小湾沙
絵有湾の義三丁廿号ヲタシリエト小岬沙岬の
義之六丁廿号ヲン子コチヤナイ小川裏屋茅ぶき有人家
つきくさ荒掛小ゟ掛料理やすも
出来ゟりホンコチヤナイ裏や一様茅ぶき三板ぶき三橋芋の杜
ゟりサふ上ハ平地山の堀ニ家を烟ニ
宮し此金雷斧石矢根石多く出ると
九丁辛音シヨカンヘツ川中十余号橋有鮭石石急流
名義瀧有川と云候此ハ源瀧の下
まく切結ゟり居ると

海ヲ隔ツ〻トヨカンベツ川太ホシヨカンベツ川左ブイウシナイ
ヨカンベツ川ヨリ七哩川ヲ経〻山ヲ越ユル事凡
程〻ノ事ニテ仙境ヲ云〻ヒ北ヘヒヲヒシヨカンベツ岳
マシケ岳同ジ狭刀岩ヒヲヒ岩ノ事ニテ小山ノ屋ヲ野ヲシヲルカ岳
小南ヲ〻奥ヘ転〻転〻転〻桃ノ如キ魚チライ多シ
平地四丁五ノ内沙浜ヨリ〻〻ヘ家ツヽキ毛武ノ如シ
家ヒトヽモ土人四十余戸ニテ惣教ヘ毛山ノ屋ヲ野ヲシヲルカ岳
ヲカムイエトヒヘ〻ヘ東ヘヘシベツノ岬ヒヘヘシベツ
ヘホロ泊大和人ヒヘヘ住ス家凡十五戸此処
ヘ運上屋ヘ家ヒヘヘ多クヘヘ有ヘヘ板葺十八棟
茅ヘヘ葺ヘヘ総テ瓦葺ヘヘ大工小屋ヘヘ地形小向ノ内カヒヘヘシベツ岬

ノ如ク湾ヲ為シテ船ヲ寄ル事ヲ得ヘヘ土産鮭鮞鮑海参鰒魚昆布并
海鼠ヲヘヘ出ス船ヲヘヘ近吹解鮮細ヘヘ有ヘヘ土人ヘヘ多ヘヘ又段ノ下ニ新家ヘヘ建ル
ヘヘ土人ヘヘ本処ヘヘ十一軒ヘヘ家ヘヘ建ル別村ヘヘ有ヘヘ住ス南北ヘヘ十五丁ヘヘ広
稼ヘヘ漁ヘヘ終ヘヘ年ヘヘ勤ヘヘ漁ヘヘ人今ハ大別村ヘヘ泊リテ所ヘヘ家ヘヘ建ヘヘ
リ諸商人店ヲヘヘ設ケヘヘヨフイ法ヘヘ有ヘヘ仮小屋ヘヘ補理
ヘヘ土産ヘヘ取扱ヘヘ其ヘヘ外ヘヘ良文化度場ヘヘ旦ヘヘ有ヘヘ近辺ヘヘ
ヲヘヘ交ヘヘ後ヘヘ段ノ下ニ広ヘヘ家ヘヘ建ル父ヘヘ八正ヘヘ旦天
ヘヘ浪ノヘヘ穏ヘヘ南ヘヘ曳ヘヘ船ヘヘ弱ヘヘ処ヘヘ来ル
家ヲヘヘ打ヘヘ払ヘヘ浪ヘヘ庵ヘヘ近ヘヘ建ヘヘ并テ中秀 茅屋一棟
茅ヘヘ二棟

本名中ラタ浮して中濱之中ゝ和名ヲタヲ夷言沙地のくゆ之メツカナイ小川ナイブト小浮是平地畑ゝよりし浮て浮の足ホントマリ小浮て小泊小濱ルフ子シユマヽイ小川浮て大なる名なり故号くビラ少の平ヲチヤシナイ小川此処呷ゝなる十二丁三十号ハシヘツノツ小岬七四丁卅号ハシベツ川中七八号沙漠石川之名義炭川との義此処川上ゝ石炭なり依て号く炭をハシハシと云也 葉や一株 板茂一株 茅ゝ三株

浮内度ゝ無く赤楊柳之ゆしよりホンハシヘツ左小川カシレハシヘツ右川ゝ上段ラウ子ハシヘツ左段平川右段源ヌフシヤ岳より来る鯢鰐鰍多しと急流之

同く濱出稼多し十丁十号ホン泊沙濱ゝて七丁四十号ハシベツ泊小濱此処東をシユマコツ子東ハシベツノツの号濱ゝなる依て号く九丁廿号シユフシベツ小川葉や一株 板ゝ一株名義桃茂魚川と云候此魚毎ゝ故号く并てシユマコツ子出岬浮て岩礫の地との後十一丁廿号シヤクマ平地書屋一株 サメ乙拉 板茂一株 坂子ゝ社 青森ゝ形なり

濱九丁ヌブシヤ川なり十号余 ころゝ不名義川筋の後ゝ志るまゝ如し夜も土人小家なりしゝ今ハなし

五月七日 安政三丙辰 松石特之小屋支配人を浮浮南石川筋ウリウなるヲシラリカをかけり山越りして西地マシケ領ヌフシヤ越の手を宮ふ之後のみ切る存中よりこそ石ゝ西ゝ中いつんとも殺し難き故ゝ此年宮し並し先私領の時了後し書とヲムシヤの中後しを示し此年書稿もなて見ゝ其ゝ当時ゝ給ゝてり其日を知る土人なる無しと語ゝるゝ

一ヌフシヤ越山中山場ゝ後ゝルウチシをマシケ境と云也事

一石特中川よりマシケ領ヌフシヤ越新道ゝ切開通行ゝ義ハ文化五辰年ゝ

諸家の人数通り付出来仕候後は役人極りの通行も宜敷候付当夏時
及大被休泊所も宜敷通路仕候去年中は表せ候て候て古来より古道
通路仕候面倒付をノフシヤより イシカリ内イタイヘツ迄夫より石狩大川和場に差住候由にて庶作 文政五午年二月石狩十三場に支配人派遣有之年
小川通行者之者共多事之事にて飯料差支候に付マシケルヒツヘ迄山越致夫
も有之越出候て古路に成申候に付古来通とは事と異人共越年
候者用意致置候 飢饉の節は不可致 別紙下に 是又他場にて飢饉及出越
候節は撰育致し置候事に候事
東蝦夷人 シノロ乙名 エンリシウ 年寄 の者を召連来る此者幼年之頃令諸家に引取 文化五辰
之節に付仕候 出者を出し等と申候て外に土人八名を雇 トツク乙名 セツカウシ トミハセ

奴武之也越図 寅 延年寺君の名付たるとし 亀和尚

古道筋辰年足跡

石狩本川 トウク

ヲシラルカプト

ヲシラルカタツコフ

ヲシラルカクシケ

ルチシホリ

ニナン子岳

イタハウシ 上ノ方人アイランケニホウレテ 定役ニ元ヲ申ヲ回ス
イワレハカル 中ノ方人イユツチール

翌八日昇ニ乗イシカリ海次ニ上ル 九ノ本 ウラレナイ 十ノ本トック 十一ノ本ヲ
ヲシラルカ川ヨリ引ク一回ニテ残ラ引ク 此川ヲ引ク仕事ニ付テハ土人ヲモシロ内ニ
到ル迄ニ多クシテ脚痛ヲ発スル人アリ又上ル艱ニ付テ並ニ元ヲ加ヘ 合人数ヲ
夜ヲモシロナイホロヲ発シテ石狩ノ方ニ向フ 途中ニテ松ノ木ヲ以テ小ク橋ヲ
架ヲ修リ 此辺ヲ一回ニ越ス 山神ヲ祭ルノ印ノ木ヲ折ル 本ヨリ此ヨリ工
ンリシウ 又ヲ癸(シビン)一回ニ越ス 此ヨリ上ル 十八ノ瀬(シビン)ヲ一回ニ越ス 此ヨリ上ル
十三ノ瀬ヲ上ル 廿余丁 山ヲ越ス 此処ヨリ石狩ノ方ヲ見ル 此辺ヨリ
ヲシラルカ川ヲ上ル 本ヨリ此処ヲ限リ舟ハヲシラルカ川ヲ上ル 此処ヨリ
カラフト一回ニ越ス 此ヨリ下リテワタルベツカウシ山ヲ越ス 此処ヨリイタイベツ

ヘシヘツ 目当ノ瀬ヲ越ス 此処ヨリ石狩ノ方ヲ見ル イタイベツ 注ヲモシロナイヨリ三里半
城下ヨリ来ル上ル 湿地ヲ行ク 此処ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
樹木ヤチ 蝦夷松赤エゾ松白楊ノ大木ヲ見ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ハンケホロナイ 西岸小川 ヲ越ス ヘンケホロナイ 西岸小川 ヲ越ス 此辺彼
方ニ座ル川ヲ渡ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
河ノ幅ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方
ヲ測ル 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方 川中ニ
有リ 此処ニ舵ヲ無クシテ中ニ越ス 此辺ヨリ雪ノ残ル上ヲ見ル 上ル針葉ノ方

[illegible]

十四日出立又川を越ることゝ[illegible]二段有此処右をルモヘツ越
に出て左股を上る是に堅雪[illegible]
流[illegible]れハ雪抜落て[illegible]入る事有いよ〳〵山峻く朱を絨を[illegible]
堅雪小足場を付て上る又二股有土人の云ハ此処右に遠えてルモツヘ左り遠
えはヲシラルカの名源に[illegible]依て一同小い神小木幣を[illegible]道を求るや
右の方を[illegible]依てまた氷雪の上を刎上り三丈斗の[illegible]の下に到る[illegible]
細く[illegible]落雪の下に流入る[illegible]急[illegible]れハ[illegible]侍より木根等根

を踏留め十七八間にて瀧の上に到る夜にまた二段あり又夜にて山神に網
ひしや左をはらうと早き時一人の若輩に迎上りいよ〳〵峠なる由にて此処に
ふ遠にて呼ばりはるに一同力を得て無きに柴蒲萄つるに取つき上りける 長さ九百ケ斗
ルウチシ 從見マシケ 領ふなる也 從見成宮を望むに又ブシヤ岳銀嶺を卧せしかく見面まで
のあり夏にて雪氣峯近く來ぬらんひしてすゝに肌寒くなりけり
皆此し傍の樹皮を剥き結ぶ是ぬ事にて大毎生柴にしに蒲萄蔓うつて
中に分布 難きをおし別くて市ゟ 三ケ斗 川端に出たり是ぬくハヌブシヤ
の左り股ゟ 後マシケにて雪ふ ルウクシロツテナイ也 夜岸たも榲かつら樹葉赤楊の楊等の大木有
そまを彼方此方と越て本川と思ふ事也 ヌフシヤ 川中六ケ 是を越るに雪融ゆるにて
足を入るや指先切るゝ如し是川中屋に來宮に是にて尚熱なしぬ

此方彼方越ゆる事凡六度にして岩の本態の出るところなるも其川端の曲て然

岩を取り来りて岩の傍に添りしつ有之（従峠凡三里位此地名を後ヲタルウエントロマフと云よし）

十五町同じく此方彼方と川の左右を取り過ぎ川添く来り石滑にして危し

凡四里余にして少し方赤岩平坦なる処に出る（後是をチホチコシケニカルシナイと云よし）丸小屋の跡一処を見

たり是捏掘者の止宿所に之と九ツ三薪有の小屋跡を見是より一同力落もなく

ぬ様見え下り手寄りて岩の方より大川へ下り来りて雇夷人を務めて危うくて

中に載せ給き右にも上り捨て上り見返へ渡舟に早五六丁のよし夜にて一同大に

悦び先焚火をなし折節に濡風にて吹きて足袋を乾かんと為しけれ

勢に一箇の鉄鍋をも踏破り以後して秦荊を筆とも也且数日の疲労

賊も是迄にて高く渡れて出るや余ら五右衛門鍋一枚にて皆辰ヶ人の者ハ

多気志楼蔵

石狩及山越夷共凡ハ其背高く熊笹掻胸まで弓筈を杖とし昨夜ハ宿る

一路の熊を居りせ各ニ糀獺兎を食ふて出しハ奇にね若きもありて時ニ梅岱

ウラリウフトより此処もニ有ル城ぞしるしを寄く付ハ百年ま近のものと

見ゆる所石狩夷宰相めのかも石狩山中に手を入れ初めるの士ありハ

此処を宰に切開きて擢居とし又峠より右手より橋戸の方え岩を切津

石狩サツホロに経るを存へ入るも益中にも少ふしても本ルヽモツヘま到にて宿す

二段より右の方シンヌフシヤ川本 左のルウクシヌフシヤ深く踏越て中ま小さき云

後ニ此本川の方はやし上りてエンナイ川右 エトンヘツ川左 ヨンチヨマフ川左 崖を

源ショカンベツ岳の東南より出て左りルウクシヌフシヤのカニナラハラツ川左 ニナ

ラハケシヨマ川左 ニセイハロマフ崩岩大 崩岩中 チヨシケニカルシ川右 アエトム子ナイ川右 ノタ

多気志楼蔵

フカヲマナイ 右川ルウエントロマフ川 エキヒラヲツケ 左ルヘシベ 越のごし 右の方本川エニナンニ モ川シヨカンヘツと ヲシラルカの訛入 りてそ源へ魚杉魁鮫チライ 椒魚杜父魚 多〳〵 マシケ乙名 ハルマ チンベ トンケ 申口也 ルモツ〳〵乙名 モトラ

ピヌフシヤ川 タントウシナイ 川巾五間 板ヲ 人家続ク六丁 辛夷 シエシエウシナイ 川巾 繰て柳ある川 ハ丁ニ十百

の実 当座一株芽ヲク 板ヲク 栃葉 ヲヲク 十丁 辛夷 アフシラリ 小川 此外場目ニある名多大名ある実 シラリと云ふる一統ニは川口より名ニ碌ニ取ニと云ニ 此ハマシケ境目 ゲニ十丁辛夷ある 此外

芽ニて採ニ漬ル事天下の比茵長イマウカシテある者の注切毛文能を山面座

文ヲ〳〵ニ取ニ料吉宮中ニ云者ル、モツ〳〵を勘左ニ付境標ニルモツ〳〵川の西

ふ村ヲ〳〵を茵長大ニ出ニは夷人ニを乞ヲ〳〵空儲〳〵アフシラリ之栃〳〵

ヲヲニ中ニ近辺多ニ改ヲ〳〵さ〳〵 真ニ名ハルマ 惠小牧 トンケ服右 チンベ 申口

ルモツ〳〵領

本名ルモヲツペと云ル、ニ汐モて都ヲツもあニ入ルペし水の引ニ〳〵此川の巾五間ニ深ク汐ヲ〳〵名ふ引ク〳〵生ニ産上座名ニの川の名ニと生ニ我の惠名ニとある栃境を乙ク

ヒラ 夷人村 ニて平崖カリ 五丁チヤシニシナイ 小川名ニ栅あニ深の実生外ヲ〳〵今戯

の方ニ附栅を結〳〵ニ縁ニと二丁 平ヲヨン子ナイ 小川五十ヲ レウケ 本名ニ岬ニ出て曲

ヲ〳〵由佐ニ号ニとうや 小川当座せメて 生ニ惣一面ニ茂ニて引 余弘化ニ

来ル時ニ一軒の人家も学ニとしふる氏事ニ宮ニ貝ニ乗ニ〳〵ル〳〵ナエサン

川 本名ナイヲサンと云ニ〳〵深ハ名ニ〳〵ふるル生ニ往法ヲ〳〵ニ在ニとフシカルウシナイ

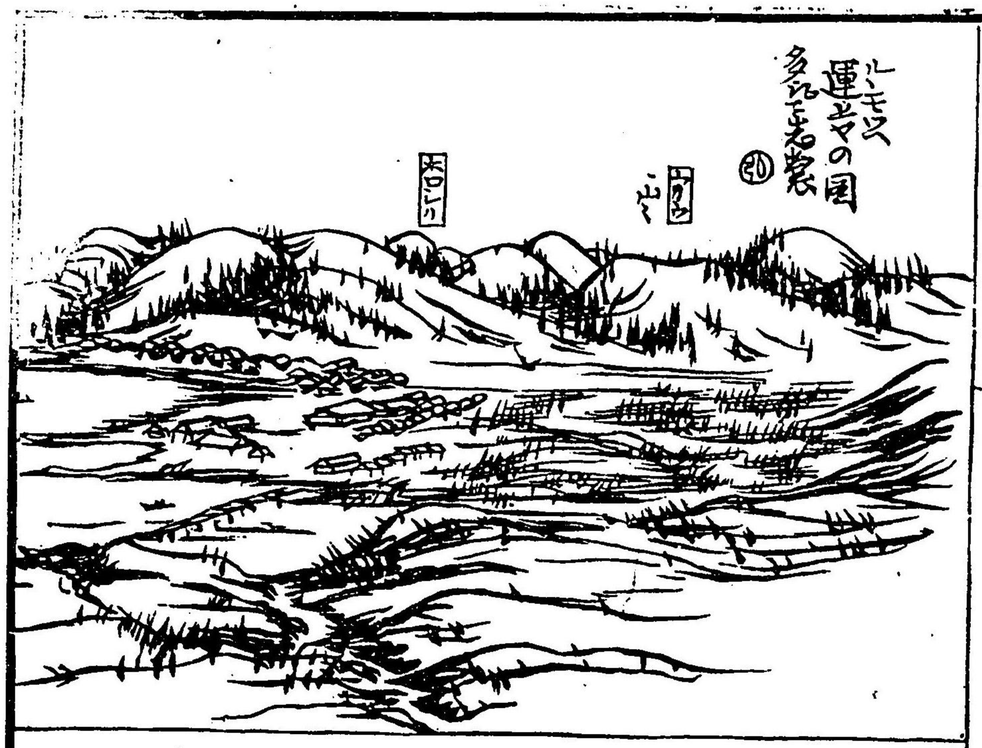
小川 生深 栃 コクリ 桃ヤマブドウ 木ニ葡萄ヲ名ニ

シユマナイ 小川 赤名川の実ニ〳〵ニ下ニをありく深ル引ク 三丁 廿百

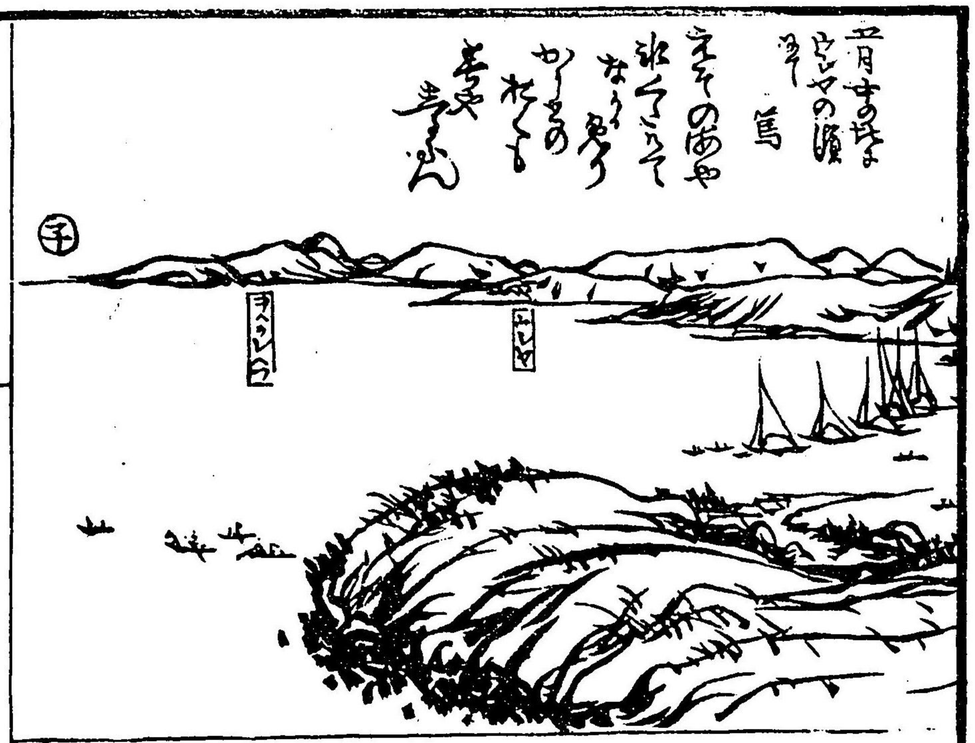
ヒラ 小休 所 并ニ 二丁 半ニ セタヘツ 川 此邊一百斗 夷人ノ居ル有 大川ノ 岸有 川巾五十間 深サ 淺瀬 ホロヒナイ 川 添近ク 枕ヲ並ル 一丁ホシナイ 并テ ホシアツカルウシナイ 二丁 アツカルウシナイ サヨ 小川 名ノ 木橋ヲ架ル 川巾 四丁 ヲタルヲマセタヘツ 小川 綠ク 沙路有 大川ノ 岸ニ 人家多ク有 此邊ノ 土人 十丁 幸ニセモシ 岸下ニ 家五軒 有ク 小休 處ノ 名ヲ 忘レタリ 本名セムシユツタヘツ 腕ノ 形ノ 如ク 曲リ 出張ル 四丁 十五 ムリクタウシ 岬 此 古土人ノ 栗ノ 樹ヲ 此處ニ 植ヘ 溜ヲ 設ケ 置ル 處ト云シリエト 岬 四丁 半ニ 十五 チラエベ 材木ノ 名ト 長塚 海獺ノ 寢ル 飛ノ 如ク 走ル 早キ 事 十五 ヤムワカナイ 小川 渡ル 處ヲ 過ル 岬ニ 出張ル 四丁 十五 ムリクタウシ 岬 此 古土人ノ 栗ノ 樹ヲ 此處ニ 植ヘ 溜ヲ 設ケ 置ル 處ト云シリエト 岬 四丁 半ニ 十五 チラエベ 材木ノ 名ト 長塚 海獺ノ 寢ル 飛ノ 如ク 走ル 早キ 事

ヲ石出 樹ノ 多ク 茂リ 有 岬ヲ 過テ 右ニ 社 并ニ 稍モ 社 有 ヲサラリ 来ル

ル、モツヘツ 川 右ノ 方ニ 有 余ノ 松有 ヲ 隔テ 深目 廣ク 土地 多ク 濕地 多ク 草ヲ 刈リ 馬ヲ 多ク 放ス 川ニ 七八百ノ 和式ノ 艘ヲ 繋ク 上リ イカウシナイ 右 川 イヨマンテウシ 川 ホンチヤシコチ 右ノ 方ニ 墓 有 上ノ 方ニ コタンベカナイ 佛サラハ 川 右 川トウフト 右上ノ 方ニ ワツカクシナイブト 上ホンニナシナイ 并テ ヨンチニナシナイ 左 川 ホロヒナイ 并テ キナチヤウシ 川 ハンケシマニ 川 ヘンケシヤニ 右 フイタシナイ 川 アトイニナイ 川 イライウシナイ 川 ヌフリケシヨマフ 川 ハナワアニユウトロマフ 川 ヘナワアニユウト



ロマフ 日 ヘナワアニユウトロマフ 日 ウルエンホロヒナイ 左 トンヘツ 左 ヘンケトンペツ 左 ホンヌカ 左 ヲン子ヌカ 左 タロマフ 左 二股是より右をホシルヽモツヘと云こそ源ヌフシヤ越の方に到ると左りの方山を一ツ越てウリウの二セイケシヨマの下に出ると本川を上るノホリノシケヲマフ 并て ヘカン 日 ノホリノシケヲマフ 并て ヘカン 日 ノホリハヲマフ 日 コトウシホロヘナイ 日 シイルヽモツペ 并て チバビル 右股是



より山越堅雪の頃ウリウ川筋トタトウ 越る又かゝ是りてホンヂバビル 并て ルウクシヂバビル等あり越る時ハウリウヘンケチラツナイに越る之を知りて為を右に遠くれどイタイペツに越ると樹木赤たもの木かつら柄根楡の類之魚類桃葉魚鯢チライ鰐後

平土人 コウスタ 申口

罷下屋 魚りや 結束荒 [illegible] 板荒十四株 茅ぐら七株 大工小屋 鍋冶小や 木挽荒

和義ニ 漁やニ 地形交子向前にシリエトの岬有

東はエヒルと對し合ふ處にて廣さ凡して船を寄する淀み方川筋迄て平地濱ハ砂
沙にして凡そ此外鮭漁有る甚しき川には秋鮭一尾も入らしめず實
に不見殘ちり安政乙卯年大漁にて塩切にても能ひかたく此川に迄出
川口を張網をおろし置するに翌朝魚の腹ちり向く死し居たりと土人多し
文政壬午改九十九軒四百七十三人 安政乙卯改六十二軒二百三十人 當時ヒラウシヤ家外の二ヶ所に分ちて此外小西地
第一の處家有ことき古しくして印たる此近傍を志るし置ぬ

天明年乃惣乙名
○イマウカシテ ── 惣乙名 コタンヒル ── 同 ヒシヨラシ

ヨタトンクル ── ムラシ
妻カンチ

小使 トヒラクアイノ

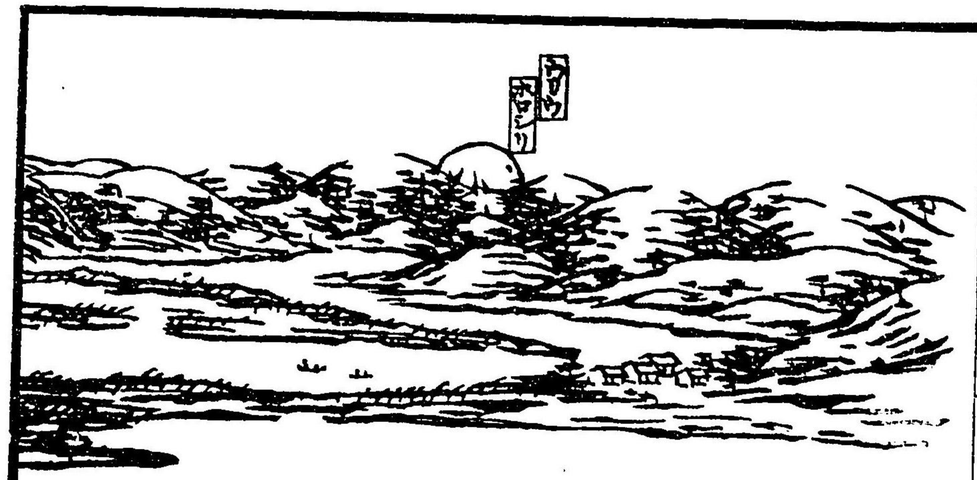
土産 鮭 鱒 鮑 海鼠 昆布 布のり 鰊 鯡 雑魚等多し 馬有 濱を継きて下る
西濱すこしサラマ、平濱 浜を濱やや小なる處 十丁 砂る ヨムル川 小 栗鼠 挨拶の處までに川口を屋

出ちる處とも云へり上え四半丁 五丁 砂る エヒルンカ岬 沙 岬の處也之 四丁 チニカマル濱 平 此外
の山桜木ありて飛驒せむる所とも云り 七丁 砂る トエタウシナイ川 小 畑ら處也之上に
畑作多し其子のみは佐々木にて此地畑多くありしものにて
三丁 四半る モンライケウシナイ川 小 モンライケも仕業之此外材木多く仕事あまたる所にて
シトマリ 三丁 砂る サン沢濱 小 名義サンチユフ深くて此も天國の縄かけ船の溜ありし
所多くと此船中天塩をより小端尖地よりみるにかく思ひしも此海府通
の舟つ会合此場夷を流れしもしと佐渡の海府通り矢橋村小家にありしを
至一本の所を西岡にて桃りしにて老付をなくし邊ぬ不目田の北の端つ
を撰ハ此天塩濱を流出する此邊家跡多し 三丁 四十五 ハヲルシナイ 本名ハヲ
チウシナイ 名義ハ牛飛ありし之 三丁 シヨウナイ川 小 此も多く流有る處ニ号く 五丁 四半る レウ

ケウレ川ヲ名ケ深ク屈曲セシ故ニ
深ク曲ルヲ名トシ又ハ此邊ノ上
平地土俗宮ケ畑地ヲセバシ云フ
シヨウヤ宮ケ塚ノ山形ニシテ外形ヲ入
ルヽ宮ケ左ニアリ由緒一株
松ヲウシヤ小林所
抜ケシ株芽出ニ株
若王社表ニ字余形名ケ塚カヽリ沼
形ヲ右ニヽヤシ宮ケ形ヲ
古墓形次ノ如シ

川筋上ヨリ二ツホルレンホロウシヤ股ホ
シウシヤ左
魚形桃尖魚鏡ヲ一

ルヽヲ面ノ中央攻號ヲ一ニ丁十ヲモウシヤ川ホ
十ニテ
ニテヲ ホロルエサン沙大ヲルヲヲヲ長ヘ一十五丁
ニテヲ ヨヘラシヘツ川中ニ年金ヲ沙汰
舟法ニ土人住ヲ名ケ
川上幅狹ク川下ヲヲ長ヘ一統川口ニ岬ヲ面ヲ宮ケ
東ヲヲ嘯ヲヲヲ名岬ヲ西ヲ宮ケ畑地ヲヲ一夷家五軒カリヲヲ
一軒ヘ上ヲテヲレロマツプヲトラフツコル左ヲラシヤシヤウシ五此ヲヲヲ深狹ク移
本ヲク出屋モサンケシヨマフヲ川名本船此形ヲク上ヲヲ二股ホ糸左リ
ツカウエンニ股右ヘウリウノイチヤシヲマフホ城ヲ左ノワツカヒリカヲ云ヲ名ケ
ヲコタンヘツノ際ニ越ヲ西方ノ方ヲヲ上ヲヘハンケラマケ子フヲヘシケラマケ子
フ此外ヨリ兩龍ノニセイケヲマフヲルモツヘ川筋ニ出ル源ヲハンケテ子ヘ
ツ并ヘンケテ子ヘツヲ越テ西統ノニセイケチヤロマフヨ城ヲヲヲルホロシリ



ヲヘシラシヘウ
眺望の圖

山深く
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大岳と云て佛飯を擧しかき高山有余
是を高龍のセヨ平にて成位三四里に
見たり又此川口にて五六里に見へ居り
堅雪の時は川口より三里にて巓に
到ると奥類鮭かし鯢鰐チライ桃
笠魚多しと熊豺犬膽鷹鷲多
し ウシヤル名サニホク同小役ヤリラカ 平土人チアマコル 申口
東岸崖下流木多し過て 一丁廿七号 インカル
ウシ 崖下 甚し 堀夷礼の時は上へ上り揚へ
せし故号くとイヌカルは幸人の縁之上

壬申妙破日拳
松浦先生手寫
国
[illegible]

を二ヘシカルウシ 平山 と云是楡皮を取る後
との義にて是山の下沙濱 廿八丁八号 エカウシ
ナイ 小沢 名義 山岸の入口と云義之
此処より後潮の時は上り越は処にて始
てテウレヤキシリの二路を見る風景出し
濱中ヲ子トマリ 岩屋一棟甘々 岩石仕小休所 渓間に川
名流るとの義之 并て シユマヲイ 岩 様 岩有る
義 二丁 エトラツケ 大岩 名義 岩有を上かし
の処有義此処渡るを見て走り過る
ホンエトラツケ 四丁廿号 フトウエンナイ 川有 名義

川口悪き義に成る也山名は処え下る

川筋右の方サルハタマシナイ 左川 チフタシナイ等小洋源はヲシラシヘツのワツ

カウエンの後ろに到る土地至て宜しく魚類ハ桃花魚鮭等のこと也

山下 七丁四分 ホロヲヘラウシナイ 本名ホロウラシウシナイ也 此処無多きに成号く僅居を下して海

岸二三丁の処に一扇の時盛なりて生るへ船を寄に宜し 一丁廿分 ヲヘラウシナイ 小川 迄 十丁五十分

トコ 川巾三分 名義上に沼なるとの儀 キムシタン子申口 また本名ツウツウクとツウとも山

時ツウクは重ると云義也と云 地名解 名義往昔は沼なりしかは實也

川口の上にて二股右をホントコ左りをウカウエントコと云 生源ヲニシカヘツ

と云ひヲヘラシヘツのワツカヒリカに到ると魚類桃花魚鮭等のこと也

此金海参漁宜しき由 十四丁二十分 クチヤウシナイ 小川 往古土人住居の為小屋無数

西蝦夷地ルヽモツヘ郡エトラツケ岬の圖 波山寫

ヲ云ヒ十四丁半ホントコ小川ヨリヤワトコと云ヒ本名ヲヤワトコタヌキ小川ヨリ岩才の破ヲ越ヘ一時餘ニシテ又ムワンカナイ小川カイタヤンケウシ小川ヨリ一時餘ニシテ又五丁ハラキウシナイ小川牛飛多シ又タ二名ヲ誤リ又ヲ葉ヲ名ヲ略ヨリ又ヲ氣ヲ名ヲ号ク〳〵ト云ヒ十四丁半ホンチユクヘシナイ小川エワウシナイ小川源ヲ名ヲ号ク〳〵ト云ヒ十四丁半カムイチクシナイ小ほ魚ノ衣ノ如シ又ヲ名ヲ号ク〳〵ト云ヒ十四丁半ホロキ小ほ名ヲ誤リ又ヲ名ヲテンヒラ小ほ名ヲ誤リ又ヲ名ヲ号ク〳〵ト云ヒ五丁ムテントカリ小ほ名ヲ誤リ又ヲ生ヲ蜂生ヲ有ハ十四丁半トウシナイ小ほ名ヲ川口ヲ号ク〳〵ト云ヒ十四丁ニヲトマリ小沼ヲ本名ヲ沼ヲ号ク〳〵ト云ヒ十四丁半ホンニヲトマリ小沼源ヲ奥ノ方平地多ク烟北際ヲ望ミ遠ク峯ヲ見ル六丁半ホンヲニシカ小川夫ヨリ左ノ方有森在一株板屋葺屋若天社ノ如シ此処旅宿不ル泊ル

名ヲ誤リ雪ヲ平〳〵ト云ヒ又ヲ名ヲ号ク〳〵ト云ヒ本名ヲヨニシホツト云ヒ一ヲヨニシヲ雲ホツヲ破ヲ処ヲ雄ヲ〳〵シユマトマリ小岬ヨリ十一丁半ホロヲニシカ川中立ヲ大ヲヲヨニシカノ夷生ヲ生ヲ出稼多ク入ヲヲ

名ヲ似ヲヲヲ母ヲ〳〵ヲ名ヲヲヲヲヲ松ヲ一ヲ

川筋二泊ル今ヲ行ク少〳〵上ヲヲサンケヘツ上ヲヲ二セイコアンヘツ生処ノ落経歴ヲ源ヲ撫ル処ハ鮭鱒魚ハ鮭桃ヲ魚雑菜ヲリ

岬ヲ過ヲハ丁十ヲホン泊ケシヲマナイ小ほ泊ケシヲマナイほ小ヲ過ヲテチ工ト工ウシ平〳〵喰土ノ方ヲ名ヲ二シホヲマナイ川木ノ根ヲヲ名ヲ〳〵十四丁半ヲタニクルほ小沙ノ膝ノ名ヲ〳〵ホロヲタニクルほ小ヲ過ヲ此処ヲ泊ヲヲ〳〵十丁半ヲチセニカルシほ小名ヲ家材ヲ名ヲ多ヲ名ヲ丁ヤワチセニカルシほ小ヲヤワヲ小キ名ヲ〳〵八丁半ヲヤワヲ

タニコル小川同しく崖下小濱五丁廿万チヤシウシナイ小浜仲ニ一ツの岩有是をなして号るよし
此処をなく目的として境を立しなり（ヒマシケ境九里三丁 ヒ里ノ名十里十四丁十五丁）右ハキムシタン子 ウシヤホータイ 申口

笞前領

トマイ 絵ニ延胡索（トマ）綱目有る義本名トマヲマイ也無く此書り延胡索多きう
右号しその義を上トマと云ハ土人の唱料にして夷地何処にもなる物也筋ありて
ヒツチリまた滴金卵（茶譜）の名有夜境に入る来海岸少々多く上に平山係て六七
月ハ昆布場にて生雑やる也尚右ハテシホと同場にて尚右ハ呂区新しう
拾新なるて土人ハなるく皆テシホ山中より掘給せしこのどうや右に運土金も
ハテシホと一口なり運上屋のおもテシホトマイと運上屋の文字のさなるに
割て刻しり又境も昔ハ無りしうゝ七千年ハ無て名シトクと云者ハ代に

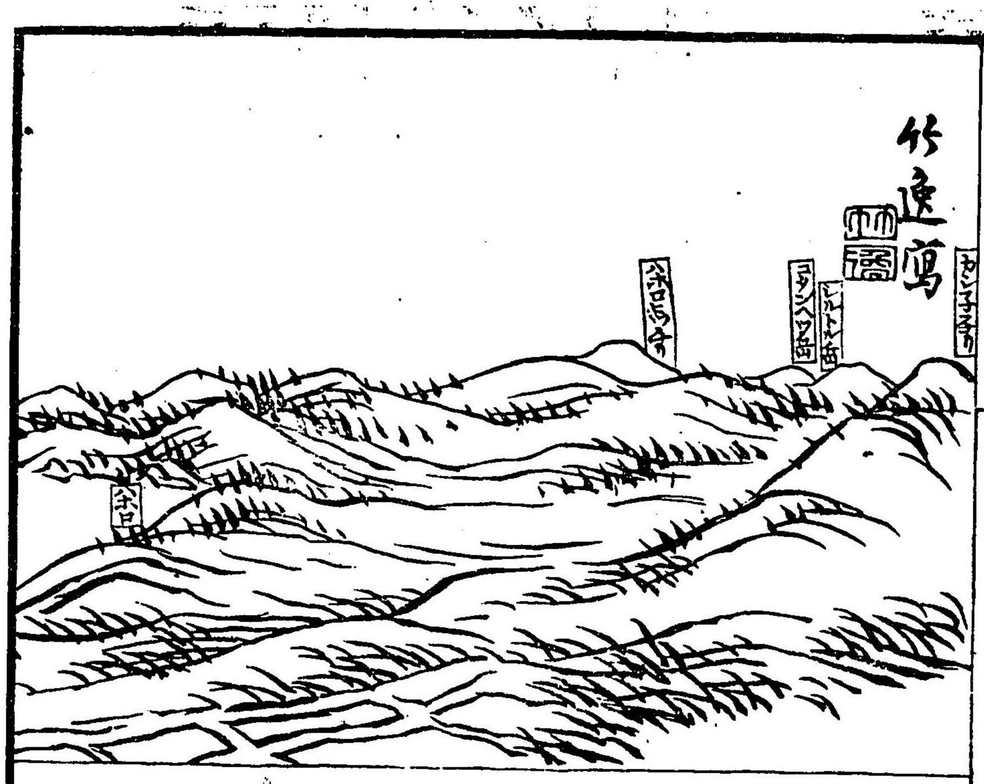
定めしなりと今の土人名トシユマといふの者語りしはテシホの上川ニ住居せし祖父
なる祖父の墓も有りと云り。まことテシホ昆布と云ものは其もの[illegible]
もテシホより産せるものにて有るとかや

○トマイ土人名 シトクタ ─ ○同 シイモウ ─ ○養子 シイヤ
実娘 シユンカラ ─ ○帰俗 緑助

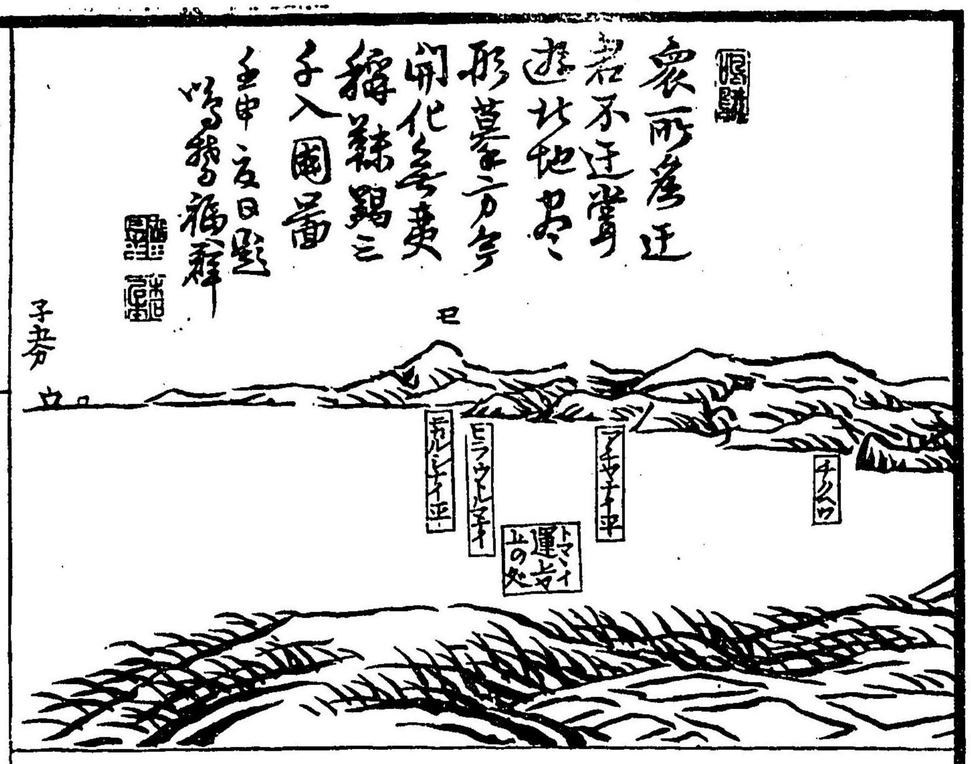
濱形并西向エチヒリウシナイ 七丁廿三間 トマリエサマ 小川有 番屋休所一棟有 浜形并の[illegible]是之 九丁十一間
メモトマリ 小沼有 四十四間 平岩リキヒリ 小川有や一棟 板蔵茅蔵 板茅社有 浜く高岸の様 五丁四十七間 ホンイチ
カルウシナイ 小沼 浜にて海藻を取るに多き処の浜の義 ホロノナカルシナイ 小沼同し義
一丁 ホロアヲトウシナイ 一丁 アラトウシナイ 小沼 名義不知 二丁廿三間 チシヤ 番屋一棟 茅蔵板茅社 秋味鯡場あり
前に大なる立岩有 本名はチトカンチシと云しとか 其義通りの土人是を的にて
矢を放ち通しと チとは放つ カンは高く義之様く号しと也 六丁十間 此処[illegible]穴居

詠多し
[illegible]きのみつうしめくえを[illegible]生居のしろめかし[illegible]かくし舞し
フレラウシナイ 小川 名義[illegible]川との義此浜ニ来るや悪[illegible]有号く 一丁廿三間
ヤムワツカウシ 小川 浜ニあるの義 三丁廿三間 ホンシヤリホ 六丁 ウエン平[illegible] 十一丁廿五間 浜口[illegible]
コタンベツ 川中ニ平会[illegible]は 十三間[illegible]船有[illegible]一[illegible] 名義村中[illegible]此川[illegible]人家有[illegible]号しと
六月十日戊午 土人三名 土人名トシユマ 小使エタキウエン イワキセ [illegible]セフヌンケ を連[illegible]料[illegible]丸木船にて
上る川幅[illegible]凡十[illegible]蓋[illegible]風[illegible]依の[illegible]
尾[illegible]左[illegible]小山有此[illegible]連[illegible] 一丁 廿 トウフト 右川口 上る沼有 上ホシヤリキヲマ 沼 と云
有ヒラケシヨマ 川 左 平ニ有[illegible]号く ホントウブト 沼有 上る ホンヒラ 山 左 ヲシヨマナイ 川 左 ハンケ子ツ
フナイ 川 右 此川口[illegible]木多くして閉り[illegible]号く 并て ヘンケ子ツフナイ 川 右 此[illegible]

多氣志樓蔵



一面の木立赤楊柳栗等也下は小世
牧冬所杖栗こゝり子升麻鍬形等
益母等まゝ木賊の二四人もまゝる
揚なり
こゝにあれおのうさまゝ唱なり
桔梗かゝるや栗こゝり此處
フシヤシナイ左川名義水形吼と唱
より雪の深と号し此処も人家諸
手しノウカルシナイ左川シヤマツタハツタラ
撲剛ウラエウシ右川ハンケセトンナイ左川セト



衆所為迂
君不迂嘗
遊北地君々
形墓方今
開化無夷
稱鞣鞨之
子入國畨
壬申夏日題
鳴鶴福群

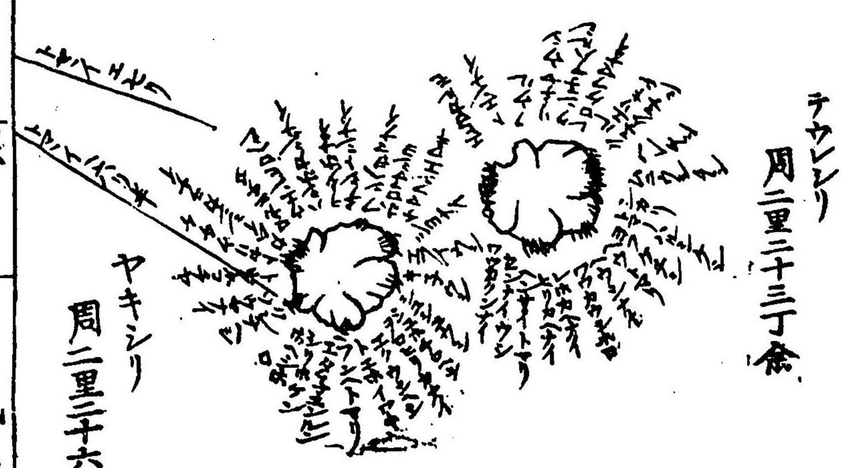
シナイ左川鷲石山屋の中ヘビハウシて越
サンケヘツ右川是才一の支流也此処上
おり木まもく多く志て船を造り
難し依て此川上を少し源をルヽモ
ツヘのヲヘラシヘツの方に知るとチエホウンド
左方チエホツナイ同せに難候多き故也
イシカルシナイ右川より石狩領に越る
と変して款冬葉のて屋を作り
寝てゝに牧多く置て豹脚虫（ヤブカ）に責
らまて寝て地難うしけることも

十二日、水源の方を廻てカムイコアンナイ 左 川 アヌトルマナイ 右 川 ウシヤムクシヒンナイ 右
川 ホロヒンナイ 川 左 此より左を上るやハホロ川 爰より越古股 モウコタンベツ 中川
を上りホリカコタンヘツ 右 川 ルウクシコタンヘツ 右 川 源両亀に越ると左りハホロクシヘツシ
イヘツ 川 水源何れも両亀に越る魚類鮭鱒鰐チライ 柳葉魚多し セフヌンケ 申口
東岸 凡十丁 平るカムイシリ 窟 上に蜂火場あり 是より浜源十七丁 廿る シヨメエシルシ 小 岬 此辺
に狸一疋と云物有 五丁 廿る ホロナイ 岩り 小川 大岸の岩出しの穴居跡あり
此岸回地平し皆赤土にシノシケウシナイ 右 川 イワツチウシナイ 川 左 川 ニイフイウシ
ナイ 川 右 其源に木有 魚類乏し 其魚の道此岸より運上屋え山越有也
此辺よりは皆人の往来もなき所なる故ここを知るべし
源岸まで木多し 六丁 廿る シラリウシ泊 小 岩 岩る渚の岩を上り岸をこえて平地十 丁 ノツ

ト云岬え出る地形変し絶向にある是より同じ此地土人小屋つくり其外の人家無ままに
氣をつけて此所を見る蓊さうなる出穂之まま此辺石井 文右衛門畑作を致しより経
ること業多しく是にて漁獵の最も早き事聞しも蓋あり 渡ルモシヘ崎ゟ十三丁十八 丁廿る此辺まで十丁
流木や赤木いつまでも家无有る事とも市をなしたる也
昔前運上屋 一棟 番屋や備米蔵 板蔵八棟 大工小屋 網蔵 茅くら三棟 舟蔵 弁天社一棟 此セハホロ南ノツトの方を一湾
とし成実向運上屋え喜子向の方来上て平山麓平開ある凡九町よ見を附
上畑地多し また穴居跡多し 土地能沃雑穀野菜能くなる 備て石井氏の
畑業おりて此地本名エンルシヨマムイと云岬の方にある所の主之出たる主人の別名
くテシホより 移住者之 文政壬午改四十八人 安政乙卯改二十人 如此可惜是を減しけるもや漢
獵之春ハ鯡昆布 秋は漁鮭鱒 冬は鹿鯡鮃ものゝ多し

テウレ 漢名前酉戌 海上七里 名義魚の背腸のみくと 周四二里 廿三丁余 近頃ときてテシホ土人共
とヤキシリ土人とおとこ漁獵なせしに近頃出稼人多く入り東面チカクシナ
イ 小 東屋一株 茅屋 川 嶺右社有 絶くチカとなる小魚にしてクシは通るの義此を魚多
き故号く哉ゆゑ平坦にして樹木かし 烟作も出稼の者如むまでも何分沒風
にて出来難しと称るにて雖蕪蕪の類は一定と思ひたる事に過りヤウシナイ此
処は暖地にて越年の者多く多く来りて住せ又西岸に岸才語とて船泊有漁是
りイシリ 其に常る併ひて
ヤンケシリ 漢名家鶴 今里半 名義魚の背腸に一説にエハンケシリの略語と云エハンケは近くシ
りも略也テウレも土をくし此略も近き故ゆ 周四五里 廿六丁 其も一天堂持也東北面にシリ
ホケシ 東屋一株 板屋三株 茅屋二株 嶺右社 大工くら 漁小屋多し 名義略の鶴の義当略土人拾物罕三人

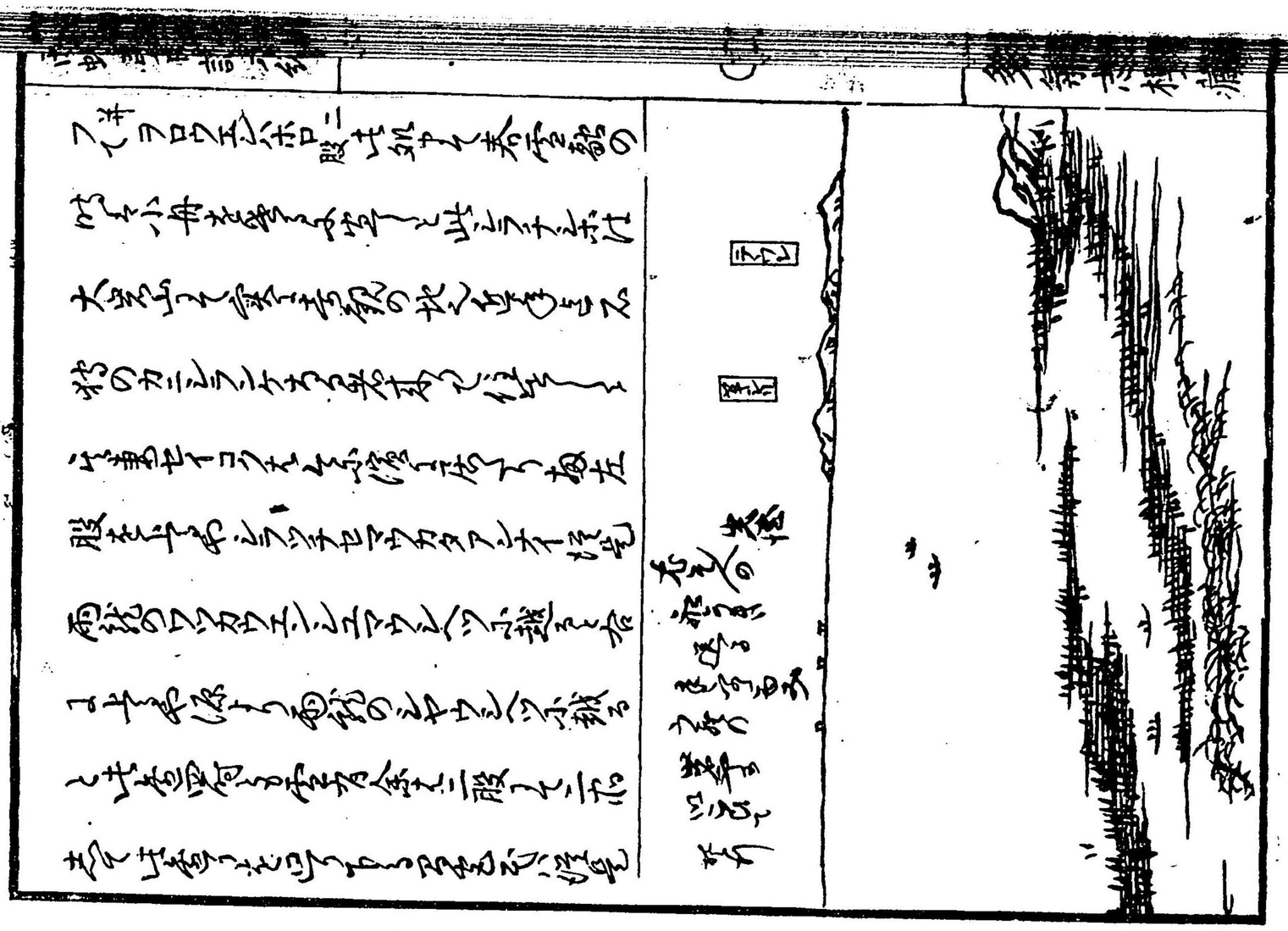
者にテシホより来り漁業をせる也巽の
方に出りてトカラツケ 岬 東や 茅屋二株 此処には
水豹多し一年の取方二千頭も及ぶと
又南面フンヘヲマナイ 東や 茅屋 其餘漁場多く
二場の産物鯡鮭鮑海鼠昆布ふのり鰯
鱆鮮チカ粕鯨魚多し先年より鱈の有
事は誰も志らざりに安政三辰年の冬出稼
の者是を鈎如め尚付莫大の出産に来
たり其に一笑ふべし 乙名エタケマ 小仕チヨケ 申口此
二名ゆゑテシホ持るれ其筈前よりの



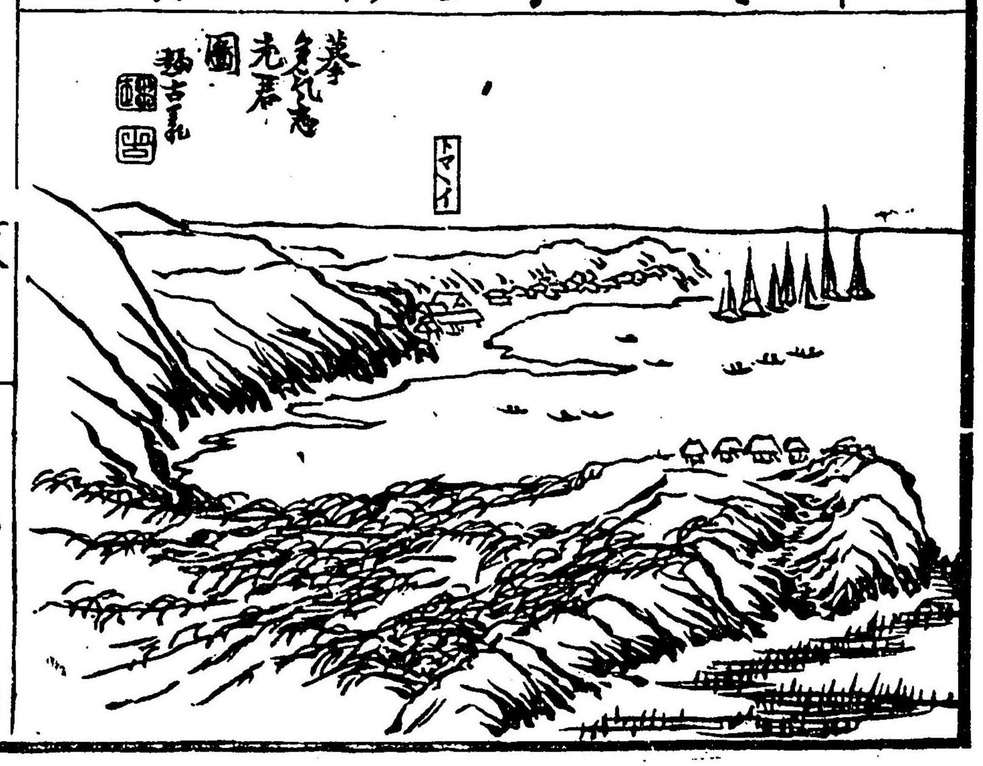
沼澤ニ便宜しつれ去実ニ附絶え
澤ヲ左崖岸下ヲ過去沼ヲ左ニ宜し 五丁十三間 泊エサマ 小 沼澤の處 五丁五十三間 アチヤナイ 小 沼翁沼と
の處甚し老人ヶ住しと此辺波穏なり
川筋チシナイ 右 オホウチアツナイ 右 左本川源近く奥ニ桃花魚斗之
越て岩下 九丁四十三間 コタンコロランシルシ 小 川名處村のある處ろの處沼目ニ人家跡あり
川筋 右 ホロヒンナイ 左 イカウシヒンナイ 右 是ニ源を近し畑地ニ出て奥ニ熊多し
一丁十三間 ホンナイ ホ八丁四十三間 ヤワラシシルシ 二丁廿三間 ヲコツナイ 十三丁四十三間 ヒライトコロマナイ 四丁五十三間 ヲチヤセ
ナイ 十九丁三十三間 シユルクヲマナイ 小 川 落合て平の下沼名有し上は平地なり 三丁 ハボロ 川中 二十三間
絶ニさし東京之形 名處はハブルにて ヤワラカ 柔の處此地沼岸ある故ニ号くと 地名 解 まさフトホロ
ふかく沼和らか成何とも切崖ある故ニさ亡り此辺ますおしの處ニ不築うち、当五也 一株

茅屋二棟 ゝあり 往古 林子平此處ニ金沢のなる由之國通覧ニ書出し有而余弘化元年通
行の附称ニ試し一切を筆せりしが安政戊川の沼を廻く渡し試しては聊
之筆を得て依て仁杉某ニ是を示しなる故ニ餘程深く辷挿し一種を得て
余ニ教示されてやまさ三國通覧ニ此沖ニ根雲と云るその言と有る迄て
飛驒の羽見之の沖ふきる雲ハ夜ニ人の夕炊をくらう云
六月十三日 出立 之巳 小舟ニて上澤同處く水淺處ニて志ゝしふてヌツホコマフ 右 川 ウ
リルンナイ 同 ヘンケウリルンナイ 同 チエツホンロ 同 カマイタルンナイ 同 落時右の方ニあり
沼ニ至曲恰も瓶の如し此処にて舟を送り離き在伎沼を離株多く其穢沼之ヒハウ
シ 左 ヲサシウトロマフ 同 セウントウ 同 ンウキナトウ 同 右二ヶ所上る沼有ウコーイウシ 右 此
邊ニて其岸ニ不築之ハンケケナシハヲマて 并 ニセケシタアンナイ 共ニ 右川 向くヲサントロマ

多気志楼蔵



面鎖に越ケより石狗上川に至りしと
其供をなせし二トシロク八十三才ハ本部
なしも實に一ツの力を得たりける魚類を
鰐鯢桃を魚チライ等也 二トシロク申口
濱中 十三丁廿五 ハホロフト 比列と川原 是より山手なる
十丁十五丁 エカウシナイ 五丁 チヤシユシナイ 小川 柵有川の
後姪是ハ後ハ波打ちて通り難き故陸路
有無て平地にて樹柏原也ありて
又沙岸通りて 四丁三十五 二カルウシナイ 小岬 名義
階有川と云比列岬有南ノツト北フウレヘ



ツ岬と對し清まりて十四丁廿五号ヲチウシナイ同同岡下十丁廿六号マシウシナイ小河路多き義

十二丁五十五号ゑて川端に出る

チユタヘツ川中二十餘号海ゑの付き道舟ワリ土人一形に休所義二株名義秋川と云まて急流義にも取る又一説に槐エヒエ

川の義とも云ひ孔ゑ是なり

川筋轉ゑ右にて赤楊秦皮柳白楊柔ふとう多く牧ゑ大なる物有上ホチライヲ

ツ右川ホンチライヲツ同クツコフウシナイ左山テレケウシ右川チクハンナイ并てクヲナイ左川二ヘシナ

イ右川洪此舎ゑ多く根山に來るヘンケチライヲツ右川ヲモヲマナイ左ゑ餘小川多しゑ

源サンケチユクヘツ右川に到る其方其高山にして岩四多しソウシチユクヘツ等大瀧有此邊

四時其雪有ゑ源雨就に越るとまて左り股よりウエンヘツの源にも越ると魚乾鮭チラ

イ桃花魚等有洛しゆクツト ムシ申口

川原まゝ十九丁三十号イウント小沼上ハ蛇多き者号くとヤキチナイ七丁五十丁モチユクヘツ川巾十余号歩行ツヤ

ホきチユクヘツと云儀是まさ料者多く有ゆ急なり

川筋右等多く志ゆし上ハハシケチヤウシ并てヘンケチヤウシ共ニ左川過て高山に来る概

本ニ之シヤクシモチユクヘツ六川此ニ至夏越る処と云義也惠教ハ同し

過てセタキナイ小川名義セタツコは長るとの義にんと処に種々出れ共歩行者ハ

との義武丁五十号モセタキナイ十九丁十号ヲン子シロチヤナイ并てシロチヤナイ小沼此ニ至て赤崩

岸にて埋木多く出たり十二丁三十号チヨチヨナイ小川名義水も沙も宜しき処との義ハ

崩岸より滴落(シタヽリ)流れ沙堅く志て歩行ハ二十一丁四十号シユシヤンヘツ小沼本名ソウサンヘツ

と云ましし滴落る川との義なり深目畑地にて生と思ひ

川筋右の方ホロヒナイ上ハ到て滴有奥に桃骨魚と魁菜のもと

五丁
手者モシユサンベツ小川カヤ子平ヲ留平此平白土ニシテ帆ノ如ク仲ヨリ巻ル有ル茶十一ノ
シヲマオイ小川此処古大ナルモノ帆ノ如ク巻ルモ其ヨリ魚ヲ捕ルヨシヲ
依テ此ヲ帆懸ノ神ト云ヨシ一ニ何時トモ
云ハズ(四十丁平ヲ)シリヤン泊小汚ナル処南風ノ為ニ此ニ船ヲ繋ク
汚ナル丸木ヲ上ノ平ニ置ヲ一ニ此ヲ文化年ニ
ここ多死いきるかいひありぬ國のこと
汚是汐干ノ時深ク成ル崖下ニ三十手者エヂオベツ小川エチヲ岬小岬ナル処ニ
ハツカイト云ル大岩二ツ有七十
平ヲ留工カウシナイ小川ナル処風波ヲ待ノ為一宿ス此ニ
ま(七十手ヲ留)フレベツ小川ヲ招ク名ヲ赤川ト云
名ヲ付ル汚ナル所ニ
(十三丁四平ヲ留)

川筋宮の後ろ平地芋原又谷地邊上ホサラハヲマフ右川芦原シタコナイ右川ヲサウシフウレヘツ二股
是より右本川筋左ルウクシヘツを越るやウエンヘツのヘウヘウレウタシヤナイ小出るクウナイ本川源ホリ
カケシヨマフ山山有熱ニ椴木ニ雜木迄四時雪有桃花魚鯇チライ嘉魚似嘉魚邊同所グーシユイ申口
止宿所板蓋廿九蓋二岸天社土人二形水悪し地形左ニ向ひ後ろ平原学生は前蓋に来る濱近し
庭まりリイシリを見る風景宜し土人小屋二軒烟作を眺手より如む浴を先
風波有る時は蓋にて宮殿場右山名を通るはナマカナイ小深ヲフユナイ小深赤土崎此
処殿場之十一丁三十五号ハラキナイ小深午飛鳥多き深の義四丁三十五号シシヤモエフ并ひヤリカウシナイ并ひホ
ウシナイ六丁十号イナヲウシナイ小川ヲヤリヘヲチナイ小川此処崎岸より大なる根木多く生
是の能乾ところを焼ふ事有まこ極くの木目有断る下ニ柴を掘之余ニ少しを携へ
来りて硯材に用ひしるしたるは是神代杉の言る物乗十二丁トコヲマナイ此香に

本しや浪高く満て上る時ハ必ず大船の船床流れあらし故号るとぞ　六千丁 六十三間

フエタウシナイ小沢 エンコウナイ 注ぐ沿[illegible]多き故に号く 此上樹く平地之 十六丁十三間 ヲタコシヘツ 川巾五六間 出

其の時所々土人へ此川の事を尋しに 名ハヲタクシヘツとして越る川と云り 今此処まで

天塩岳前の境目として 従ルヘモツヘ境十二里 十七丁十三間

川筋左右とも平地にして草原なり 上ニキムンクンヲタコシヘツ小川右ニ

到り少し上りてシアマンヲタコシヘツ共ニ源近し 今魚類柳葉魚鯇鰄喉

等有 源よりウエンヘツ川筋ニ越る シイヤ トシユマ エタキウエン申ニ 等香ニ志るし畢て

那らむれを諸じしるに来よりて[illegible]の復汎雲の夕等

西蝦夷日誌巻六編　終

年のはじめ早くより行ゆく年の事を聞き[illegible]

むかしより[illegible]川の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

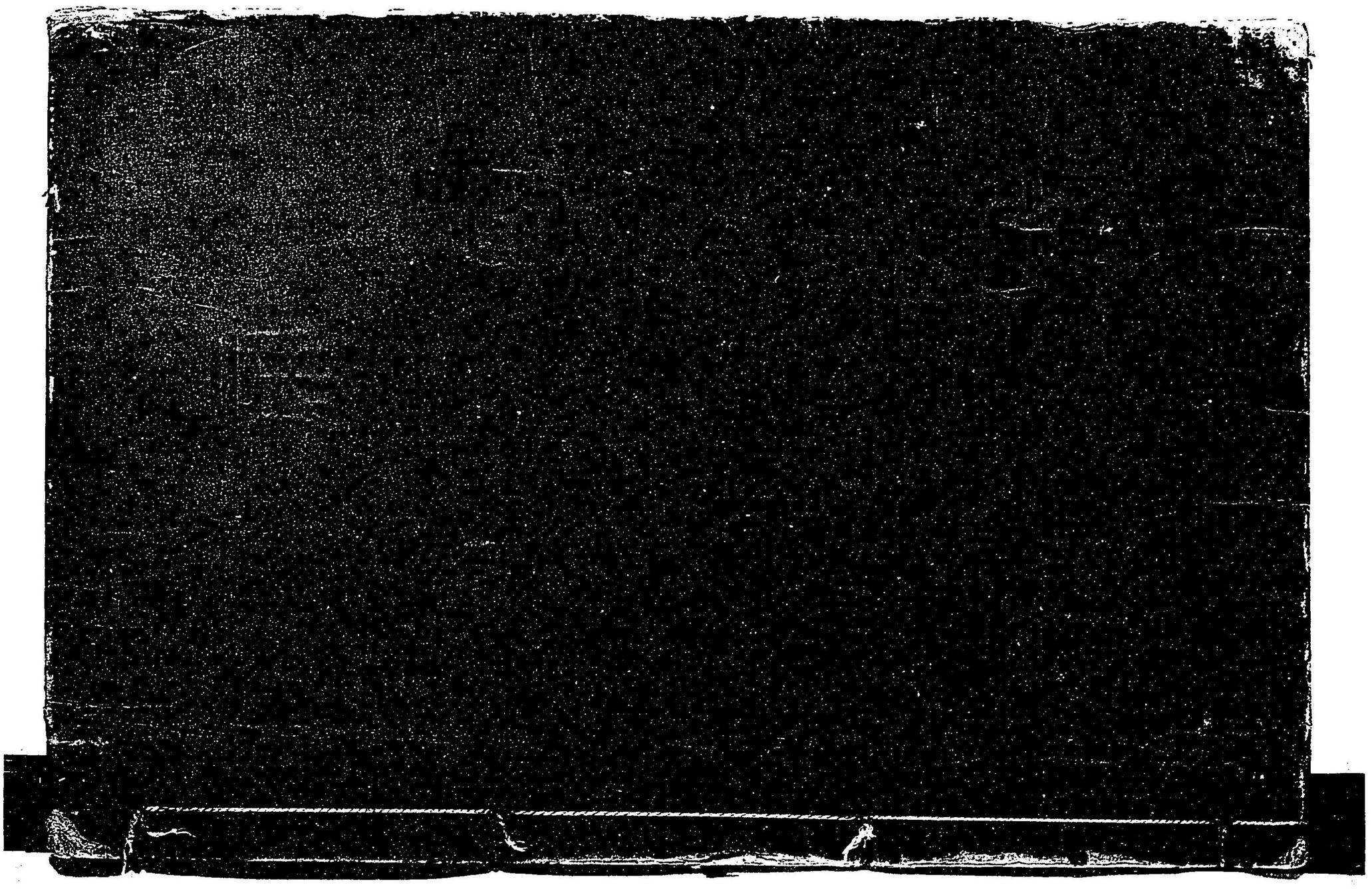
[illegible]十[illegible]

[illegible]松前[illegible]大路[illegible]

[illegible]アブタ[illegible]

さて人へイチスケてふもの出きたり[illegible]

世にはまれしなくめつらしきことにいひ何人ともしれ
さる故此法も極美人何事もあらはしてまきてきれ事
そこに何事をかくる故ありかへて何やしと思ひ又
いふにはあらずにあらん兼ねるかゝる傳ひけきにゝる
ことをやうはさるゆゑのいはきにしゆゑなる事を
さしあしまる人とやうに掃に乗りしかれも一と
志るしこれ此の法のもしまとつるにあらず
明治五年の春月にあり　桂屋のあるし　屋光

多宗志樓藏

124
1/24